

# 清末小説から 137

2020.4.1

いくたびかの阿英目録27………樽本照雄 1  
 劉家公認の贋作『老殘遊記』………神田一三 4  
 包天笑「空中戦争未来記」など(下)………荒井由美17  
 付建舟『商務印書館<説部叢書>叙録』について………樽本照雄23  
 关于林译小说口译者力树萱的一则材料………王 玉、梁 艳34  
 【再録】菊池幽芳『乳姉妹』の原作(速報)………樽本照雄36  
 清末小説から16、22、33、38

★樽目録第12版を公開しました。付建舟氏の商務版「説部叢書」は本当によく集めたと思いま

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方



にさせた濡れ衣を張治も支持して継承するつもりか。

ここには注釈がついている。意味深長だ。原文を引用しよう。

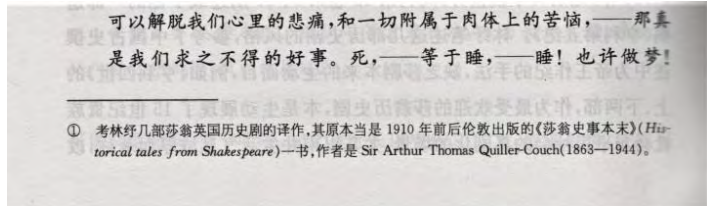
## いくたびかの阿英目録27

樽本照雄



### 林訳シェイクスピア冤罪事件——露払い

林紘がシェイクスピアの歴史劇を漢訳した。たとえば「亨利第四紀(ヘンリー4世)」を紹介して、張治はつぎのように書く。「叙事体に書きあらため原本の味わいは完全に失われた[改成叙事体完全失去了原本的味道]」(183-184頁)というのだ。おやおや。鄭振鐸が林紘



可以解脱我们心里的悲痛,和一切附属于肉体上的苦恼,——那真是我们求之不得的好事。死,——等于睡,——睡!也许做梦!

① 考林紘幾部莎翁英國歷史劇的譯作,其原本當是1910年前後倫敦出版的《莎翁史事本末》(Historical tales from Shakespeare)一書,作者是 Sir Arthur Thomas Quiller-Couch(1863-1944)。

①考林紘幾部莎翁英國歷史劇的譯作,其原本當是1910年前後倫敦出版的《莎翁史事本末》(Historical tales from Shakespeare)一書,作者是 Sir Arthur Thomas Quiller-Couch(1863-1944)。184頁

2007年だった。私は林訳シェイクスピアの底本はクイラー＝クーチ Arthur Thomas Quiller-Couch『シェイクスピア歴史物語 HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE』(ロンドン1899初版/ニューヨーク1900再版)だと指摘した\*83。この発見が論文「林訳シェイクスピア

冤罪事件」につながっていく。

張治の注釈はまさにクイラー＝クーチの原作を指摘しているのではないか。しかし奇妙なことがある。なにによったのかを説明していない。

典拠を示していないばあいその意味はふたつある。ひとつは自力で発見した。もうひとつは別の論文から無断借用した。

では張治は樽本論文を参照したのか。

私は張治の説明を読んで直接は参照していないと判断する。

まず樽本論文に触れない。また張治注の冒頭に「考えるに[考]」があること。さらに出版年を「1910年前後」とぼかして、あるいは間違っているからだ。

上の3点をもってとりあえず私はつぎのように推量する。張治は樽本論文とは無関係に独力でクイラー＝クーチ本を探し当てたのだろう。

該書の書評が書かれている。

劉錚「林琴南の功臣」(『東方早報』2012.11.25電字版)だ。劉錚もこの点について私と同じ見方を示している。張治が「自分で探してきた結果だろう」と。そのさい劉錚は原書初版が1899年だと指摘する。

だがどうしても疑問が残る。張治が自分で探し当てた原本のはずだ。なぜ刊年を「1910年前後」だとあやふやにするのか。再版本だと言いたいのか。そう書く理由がわからない。また鄭振鐸が林紓に押しつけた冤罪への言及がない。林訳小説がシェイクスピアの戯曲を小説化したものでないとわかれば林紓冤罪に話が展開していかないはずがない。不可解だ。

張治のこの注は文字通り「取って付けた」ように私には見える。

つぎのような光景が私の目に浮かぶ。ここはあくまでも私の空想だ。

張治は林訳シェイクスピア歴史劇を取り上げて従来どおりに戯曲を小説化したと林紓を非難した。ところがクイラー＝クーチ原作が出てきた。急遽、底本についての説明を注に押し込ん

だ。本文を修正する時間、余裕がなかったらしい。なにをあわてるのだろうか。

やはり「1910年前後」というのが気にかかる。どこから引っぱって来たのか。

クイラー＝クーチ本を「1910年前後」出版とする箇所につながるのではないか。そういう書籍が張治以前に刊行されている。あやしい。

劉宏照『林紓小説翻譯研究』(上海世紀出版股份有限公司、上海訳文出版社2011.10 学人論叢)がある。刊年を見れば張治本(2012.8)よりも時間的に先行する。



その「後記」に劉宏照は自分の著書に心残りとして不足があると書く。そのなかのひとつは樽本の最新の研究成果を全面的に把握していないという。中国人研究者でここまではっきりと書く人は珍しい。正直な人だ。

この箇所ではそれ以上に詳しくは書いてない。しかしわたしにはすぐわかった。林訳シェイクスピアにはクイラー＝クーチ本があったことを指すに違いない。

劉宏照の該書に掲げられた「主要参考文献」には、関係する論文が収録されていない。ただし52頁で私の著作『林紓冤罪事件簿』を紹介する。また実物は未見だと書く。「主要参考文献」に掲げなかった理由だろう。

「1910年」に関して劉宏照の「附録2 林紓訳作目録」(359頁)に言及がある。統一番号86「雷差得紀」の説明文から関係部分を引用する。

日本学者樽本照雄謂《雷差得紀》、《亨利第四紀》、《亨利第六遺事》、《凱徹遺事》、《亨利第五紀》均訳自奎勒・庫奇(Arthur Thomas Quiller-Couch) 改寫之《莎士比亞歷史故事》(*Historical Tales from Shakespeare*) (1910), 非訳自莎劇。

張治は書名を『莎翁史事本末』にしていた。あるいは誤植を含んで劉宏照の記述とは細かく異なる部分もある。だが劉宏照のここに見える刊年「1910」に注目する。張治はそれに「前後」を加えた。だが書いていることは基本的に同じだ。

劉宏照も樽本論文を直接読んではいない。どこからか聞いて「1910」年と記述した。

その元論文は、范伯群「原原本本(二題)」(初出は『清末小説』第31号2008.12.1。劉宏照が読んだのは『書城』2008年第8期掲載とある)という。范伯群論文のなかに収録されているのは「(二)為83年前林紓の一樁冤案平反」だ。林訳シェイクスピアの原本は、クイラー=クーチ本であり1899年に刊行されていると正確な紹介がある。

ここで疑問が出てくる。劉宏照は本文52頁において正しく1899年と書いているのだ。それを同書「林紓訳作目録」部分でなぜ「1910」(359頁)と間違えるのか。単なる勘違いなのだろうか。詳細は不明だ。

とにかくそういう文献があると確認しておく。

上に見た文献の流れを図式化するとつぎのようになる。

樽本→范伯群→劉宏照→張治。少なくとも後者ふたり劉張は元論文にたどりついていない。

伝聞が伝聞を再生産している。現在のウェブ状況を考えると信じられないくらいに研究者の対応が遅れている。

私にしてみればある部分は迷惑なはなしだ。私の論文は清末小説研究会ウェブサイト <http://shinmatsu.main.jp> で公開している。それを読んで正確に記してほしかった。妙なことから繰り返す。劉宏照は本文のなかで正しく書きながら目録部分で誤記した。

「1910年」を手がかりにもう一度整理する。劉宏照はクイラー=クーチ本についてその刊年の一部分を書き誤った。張治はその間違っただ箇所をわざわざ引用した。劉宏照本文の正しい記述を読まなかったのだろうか。そういうちぐはぐなところを見て私は「なにをあわてるのだろうか」というのだ。

張治は「1910年前後」について典拠資料を明記しなかった。しかも引用した箇所が誤っていた。その上に無断借用したといわれてもしかたがない。気の毒なことだ。

それにしても2007年の発見から2012年の張治まではわずかに5年間しか経過していない。林紓の漢訳シェイクスピア歴史物語がクイラー=クーチの原本にもとづいているという説はすでに検証不要の定説に定着している。めでたいことだ。

阿英目録の誤りが現在にいたるまで強固に維持されると思えば研究の激変にも対応した書籍が出現する。おもしろい一言である。 罍

#### 【注】

83) まず速報を書いた。樽本「林訳シェイクスピア冤罪事件(要旨)」『清末小説から』第85号2007.4.1。1-2頁。要旨: 林訳シェイクスピア歴史劇には、小説化された英文原作が存在していたことを速報する。クイラー=クーチ Arthur Thomas Quiller-Couch『シェイクスピア歴史物語 HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE』1899初版だ。

## 劉家公認の贋作『老残遊記』

神田 一三

表題の「劉家」とは劉鉄雲の子孫を指す。劉鉄雲自身は「劉氏」と称して区別する。その劉家の人たちが刊行を許可した贋作『老残遊記』という意味だ。「劉家公認の贋作」など聞いたことがないと思う。私が本稿ではじめて使用する。

贋作の存在は1925年に胡適が指摘して知られることになった。胡適が使用した用語は「偽作」だ。偽作という点のみが強調されて現在にいたる。研究者には周知のことだ。

しかしそれが劉家公認だとしたらどうだろう。ありえないと思うのが普通ではなかろうか。

胡適の「偽作」認定は強烈だった。偽作だと明言されてしまった書籍だ。研究者がその思い込みから自由であることはむつかしい。しかし必要な材料はすでに数十年前から提出されている。先入観なしに読めば真相にたどりつくことができる。

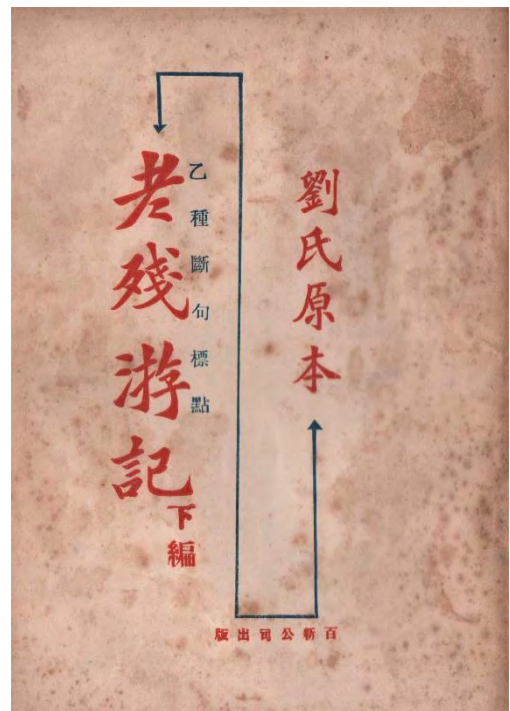
厳密に把握しなければならない。前半20回は劉鉄雲の本物で後半20回が贋作の『老残遊記』だ。それがどのようにして成立したか。以下において説明する。

### いくつかの版本

阿英によれば甲乙の2種類がある\*1。

甲種本は線装石印1924年刊。乙種本は洋装鉛印で同年刊。ともに百新会社が出版元だ。表紙に「劉氏原本老残遊記」と書かれていると紹介する。『老残遊記』で劉氏となれば著者は劉鉄雲に決まっている。だから阿英は該書の著者名を記述しない。著者名をどのように表示するかが特別に重要だという認識がなかった。

架蔵のひとつは洋装活版2冊1925年三版だ。「乙種断句標点／劉氏原本」で上下編、原著者：丹徒劉鉄雲、点校者：許嘯天、発行者：徐鶴齡、上海百新公司、中華民國十三年十一月初版／中華民國十四年十月三版とある。

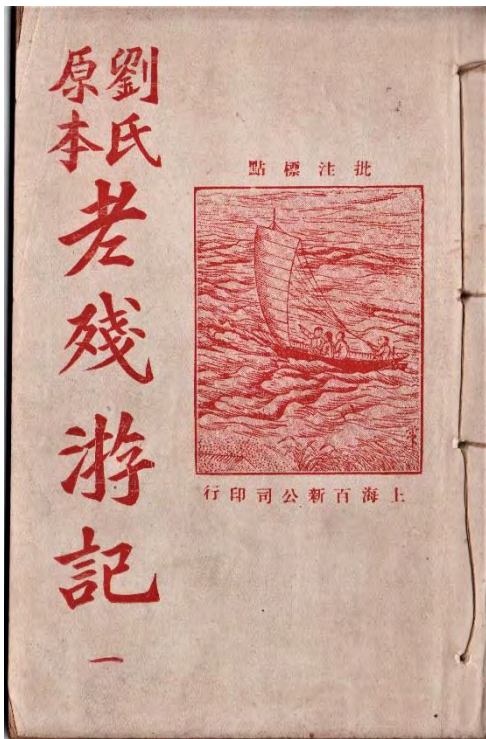


乙種

原著者を劉鉄雲としており普通の表示に見える。しかしこれには裏の事情がある。

もうひとつは線装石印4冊1928年本だ。ただし贋作を含まない。表紙に「劉氏原本」と表示する。上編20章のみ。原著者：丹徒劉鉄雲、校閲者：澄江徐鶴齡、上海百新公司、中華民國十七年八月初版、丙種。阿英のいう甲乙のほか丙種もあることがわかる。





丙種

原著者に劉鉄雲と表示するのは後の重版である。贋作の初期版本は基本的に洪都百鍊生とする。劉鉄雲名を使用するか否かが分かれ目となる。理由があるのだ。

百新公司刊行の初版は1916年8月に出た(初版は百新公司本を指す。以下同じ)。それ以後、判型、表紙意匠、印刷方式などを変化させながら増刷をくり返している。後版のひとつの奥付を見れば1923年4月の十九版あるいは1934年6月二十六版がある。劉徳隆は1937年5月二十九版をあげる\*2。

出版元の百新公司については朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』(1993)\*3が簡単に紹介している。それによれば1912年に徐鶴齡が創設した。最初は百新図書公司といいのちに百新書店と改名したという。1930年代からは張恨水、周瘦鵬、李涵秋らの小説を出版した。本稿で示している百新公司は百新図書公司と同じ意味と考えていいだろう。記録によれば1917年から1953年まで存在している。

### 不思議な肖像

清末小説で重版される作品はごく少数に限られた。ほとんどの作品が雑誌初出で終わりだ。幸運にも単行本になったとしても初刷りでとまる。南亭亭長「文明小史」でさえ『繡像小説』連載終了後の1906年に商務印書館から単行本で刊行されたに過ぎない。しかも著者名は記載していないのだった。一般読者がその刊行を知らないもの当然だろう。李伯元の名前で再登場したのはなんと約50年後のことだ。阿英の叙引がついた北京・通俗文藝出版社1955年本である。数種類を除いて清末小説はそれほど残りにくい。

ところが百新公司系『老殘遊記』は以上だけでも版数は十分に多い。これほどあるのは珍しい。

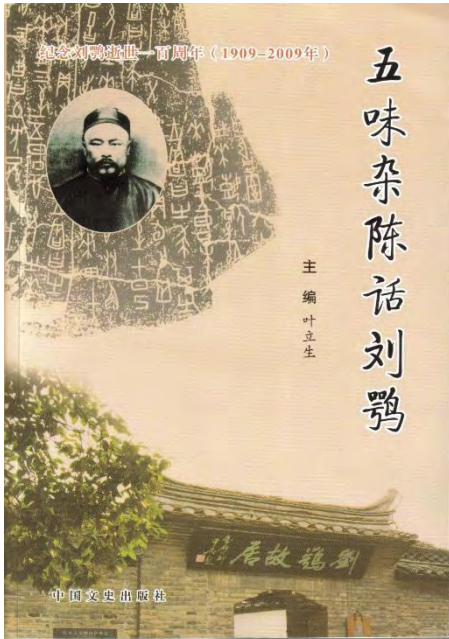


また別に洪都百鍊生劉鉄雲『(新式標點)老殘遊記続編』第21-40回(華北書局1931.10。孔夫子旧書網より)が出ている。これは贋作部分のみを単行本にしたもの。表紙に「老殘遊記作者洪都百鍊生劉鉄雲先生之遺像題字為羅振玉之手筆」と説明する。本文は贋作だから劉鉄雲の名前を出せば偽の看板だ。

その表紙を飾った劉鉄雲の肖像は当時として

は希少の部類に属す。よく見る劉鉄雲の写真（『鉄雲臚龜』）とは異なるという意味だ。「鉄公遺象」という題字は羅振玉の筆になるとも明らかにした。劉鉄雲と羅振玉の関係を知っていればなるほどと納得のいく説明だ。

一般に出まわった肖像ではない。劉鉄雲の親族から入手したものだろう。この「鉄公遺象」が再び公開されるのは葉立生主編『五味雑陳話劉鶚』（北京・中国文史出版社2009.3）まで待たなくてはならない\*4。



該書は百新会社が刊行を計画していた続編の原型である。書名、内容とも一致する。ただし作者を劉鉄雲とするのは百新会社とは直接の関係はない。念のためにいっておく。華北書局だから出版社が異なる。また1931年という刊年からして本稿でいう「劉家公認の贋作」には含まない。ただの贋作だ。それも海賊版だと思う。

この華北書局本には不可解なことがあるとふたたびいう。洪都百鍊生劉鉄雲と明記するのはその後の文献によって虚偽を追加したとわかる。ただ普通は見かけない劉鉄雲肖像\*5を表紙に使用しているのはなぜなのか。肖像を劉大紳が所有していたことが現在はわかっている。それが1931年刊行の該書に掲載されている理由がわ

からない。何度も書くのはあまりにも不思議だからだ。表紙に使う許可を劉家から得ていたのか。肖像は劉大紳所有だからなにかしらの関係はあったはずだ。不明なままにする。

疑問はまわって戻る。劉家が贋作者に劉鉄雲の肖像を提供するだろうか。かなり奇妙であるのは事実だ。『続編』は1931年の出版だから1916年初版本に比較すると時間的にだいぶ後の刊行物になる。出版社は違うが本文は百新会社本と同じ。

どれくらいの数が刊行されたのかわからないくらいに版数が多い。それも基本的には百新会社本だけだ。海賊版を除いて1社独占出版のような印象を受ける。これには理由がある。

いくつかの謎をはらんでいる。だが一般の読者には興味のない話かもしれない。一連の百新会社本は1937年当時奥付を見るかぎり二十九版まで増刷するくらい販売され続けた。それ以降の版本は追跡できない。それを見てもおおいに歓迎されたとわかる。

#### 胡適が偽作と指摘

一方で胡適が「老残遊記序」（『老残遊記』上海・亜東図書館1925.12）においてそれが偽作であることを指摘した。

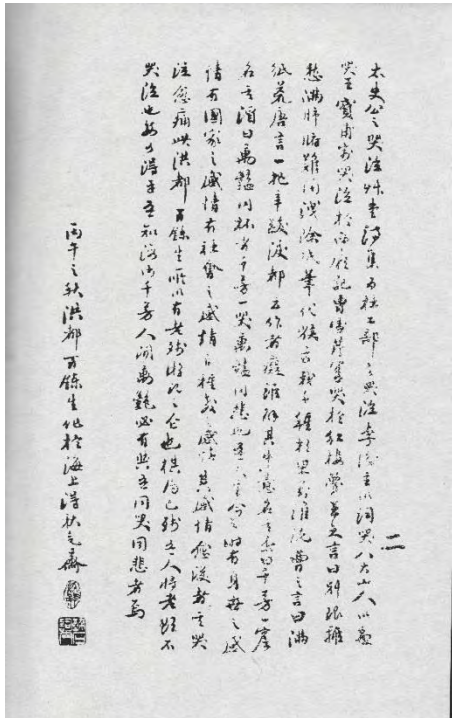
彼が示す版本は上下両巻で「全本」「照原稿本加批増注」と書いてあるという。胡適は出版社名は出さず1919年刊とだけ記述する（版数不記）。書いてなくとも百新会社本であることは明白だ。

その奥付に「著述于清光緒丙申年山東旅次」と記述する箇所を胡適はとらえる。あとで示すが手元の1923年十九版にも確かに小活字でそのように印刷されている。百新会社本のいくつかに見ることができる。その記載が偽物であるのは明らかだ。

丙申1896年は庚子1900年の五年前だし原序が記すのは丙午（1906）之秋だから年数が合わないといふと胡適は主張した。

胡適が庚子を基準に置くのは「老残遊記」の執筆時間を「庚子(1900)の乱後に書き始め丙午(1906)に完成した〔此書作于庚子乱後,成于丙午年〕」(23頁)と考えたからだ。これは胡適独自の把握であり根拠はないといっている。

執筆開始を庚子後とするのは間違っていないが大ざっぱすぎる。特定してはと言えない。叙に「丙午之秋洪都百鍊生記於海上得秋齋」と明記する百新公司初版本その他がある。



百新公司初版(影印)

胡適はその「丙午之秋」を疑うことなく信じた。今だからそれが虚偽であるとわかる。劉鉄雲の「自叙」に日付はない。叙が書かれたのは作品完成後だと胡適は考えた。「丙午之秋」を根拠とする。正しくない。劉鉄雲は『天津日日新聞』にあらためて連載を始めるにあたり自叙から発表を開始している。光緒三十一年乙巳年九月初一日(1905.9.29)だ(郭長海33)。

胡適はそこにある捏造年月を根拠にして百新会社の40回本は「偽作」で絶対間違いないと宣

言したのだった〔四十回本之偽作,絶対無可疑〕(37頁)。

偽作であるという胡適の指摘が正しくないとはいわない。後半の第21-40回はまさに贋作である。問題は胡適による決めつけだ。前半20回の真作を含んだ全体を偽作と言った。そうして真相が見えなくなった。

贋作『老残遊記』だという指摘は学界に影響を与えた。胡適の文章が公表されて以来、贋作百新公司本について取り上げる研究者はいない。せいぜいが版本を説明して贋作もあると言及するくらいのことだ。どういう由来の贋作なのかを深く探索する専門家はいなかった。贋作は贋作というだけで見捨てられるほかない。

ただし胡適の文章が公表されたあともそれに関係なく百新公司本が売れて版数を重ねたのは前述の通りだ。

私は別の視点からこの百新公司本をながめる。

確認する。百新公司本『老残遊記』は前半が劉鉄雲の本物で後半が他人による贋作である。胡適は「上下両巻」全体が贋作であるかのように印象操作した。違う。実態は本物と贋作が組み合わさった異形の書物だ。

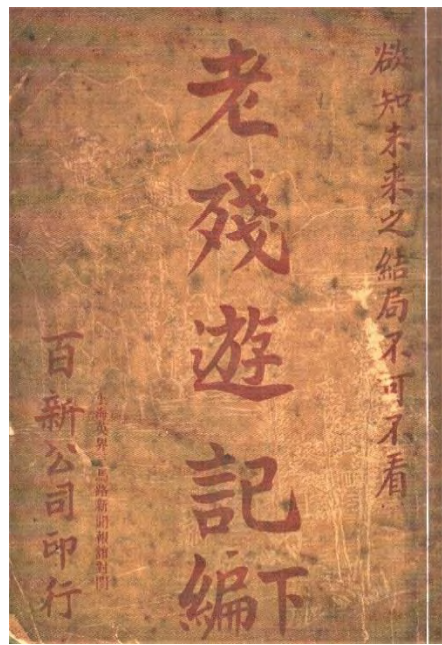
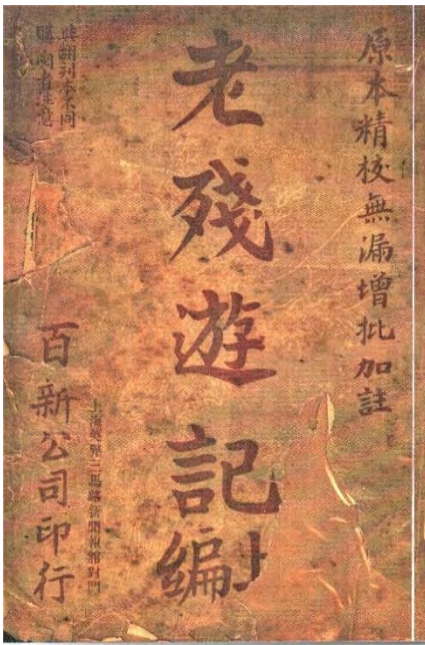
洪都百鍊生は誰なのか不明だった時期が長くつづいた。著者が劉鉄雲であるという事実がどのような経緯で社会へ知られていったのか。本稿はその軌跡をたどる試みのひとつである。手がかりのひとつはこの贋作にある。

### あらたな展開

贋作の初版(影印本)をあらためて見る。

『老残遊記』上下編2冊だ。上編表紙の右側に「原本精校無漏增批加註」、左側に「与期刊本不同/購閱者注意」と示す。奥付は原著者: 洪都百鍊生、批閱者: 膠州傅幼圃、校閱者: 澄江徐鶴齡、上海・百新公司、中華民國五年八月原本初次印刷出版だ。初版が1916年であるのは確認できる。下編表紙の右側は「欲知未来之結局不可不看」と変更した。





初版影印本 上編表紙奥付 下編表紙 奥付なし

初版には「著述于清光緒丙申年山東旅次」はない。胡適がよった1919年版にはある。また1923年版でも確認している。後版でわざと追加したようだ。

下編の奥付は影印されていない。ないはずはないと思う。底本とした版本にたまたま奥付が

なかった可能性はある。前出劉徳隆論文では初版について奥付の著者は「前人」とする(41頁)。この「前人」には重要な意味がある。後で触れる。実物の初版下編を見ていないから奥付の有無については判断を保留しておく。

気になるのは表紙に「与期刊本不同」と表示した部分だ。この「期刊」は『繡像小説』以外には考えられない。百新会社の編集者はそれを知っている(後述)。知る人は少数のはずだ。

次に示すのは同書重版本(複写)である。

『老殘遊記』上下編 表紙は『劉氏原本老殘遊記』。上編奥付は原著者：洪都百鍊生、批閱者：膠州傅幼圃、校閱者：澄江徐鶴齡、上海・百新公司、中華民國五年八月照劉氏原本印行出版／中華民國十一年四月第十八次重印出版／中華民國十二年四月第十九次重印出版。下編奥付は著者：前人のほかは上編と同じ。

胡適は「全本」「照原稿本加批増注」と説明していた。上記版本の奥付は「上下／編四十章増批加註」だ。版によって表現が異なるらしい。

初版の原著者は正しい。後版では上のように「洪都百鍊生」と誤植する。同音だし紛らわしい漢字だからしかたがない。

1916年初版、あるいは1923年十九版という



中華民國五年八月照劉氏原本印行出版  
 中華民國十一年四月第十八次重印出版  
 中華民國十二年四月第十九次重印出版

上編四十章增批加注  
 老殘遊記上編一冊  
 定價大洋八角

著者 洪都百練生  
 批閱者 膠州傅幼圃  
 校閱者 澄江徐鶴齡  
 刷印者 百新公司  
 總發行部 百新公司  
 上海英界新馬路福海里西門牌五百四十六號  
 發行人 徐鶴齡  
 代發行 外埠各書店

版權所有  
 不許複製

劉氏原本  
 老殘遊記  
 上編  
 精校無漏增批加註



此書原本  
 共四十章  
 分上下兩  
 編在清光  
 緒丁酉歲  
 將全書之  
 半披露於  
 天津日日  
 新報兩章  
 後京津滬  
 書坊摘抄  
 印成鉛石  
 印小本並  
 將其原文  
 割裂改動  
 本公司  
 以是為之  
 憾特覺得  
 此兩編之  
 原本印行  
 公之同好  
 一字不漏  
 願愛諸君  
 覽別是幸

百新公司印行

中華民國五年八月照劉氏原本印行出版  
 中華民國十一年四月第十八次重印出版  
 中華民國十二年四月第十九次重印出版

下編四十章增批加注  
 老殘遊記下編一冊  
 定價大洋一元

著者 前  
 批閱者 膠州傅幼圃  
 校閱者 澄江徐鶴齡  
 刷印者 百新公司  
 總發行部 百新公司  
 上海英界新馬路福海里西門牌五百四十六號  
 發行人 徐鶴齡  
 代發行 外埠各書店

版權所有  
 不許複製

劉氏原本  
 老殘遊記  
 下編  
 款知未束之結局不可不看



此書原本  
 共四十章  
 分上下兩  
 編在清光  
 緒丁酉歲  
 將全書之  
 半披露於  
 天津日日  
 新報兩章  
 後京津滬  
 書坊摘抄  
 印成鉛石  
 印小本並  
 將其原文  
 割裂改動  
 本公司  
 以是為之  
 憾特覺得  
 此兩編之  
 原本印行  
 公之同好  
 一字不漏  
 願愛諸君  
 覽別是幸

百新公司印行

刊年が要注意だ。いずれも胡適の亜東図書館本が1925年に刊行される以前であることにご注目いただきたい。つまり胡適が該本の「序」において偽作だと指摘する前の刊行物である。胡適以前には誰も百新公司本の後半が贋作だとは思っていない。区別するための一般的基礎知識がない時代だった。

十九版の上編表紙は「劉氏原本／老残遊記上編／精校無漏増加批註／注意／百新公司印行」と詳しくなる。下編表紙は絵図を変え3行目を「欲知未来之結局不可不看」とする。初版からの流用だ。部分的に異同はあるが残りは基本同文である。

この「注意」を見る(記号は筆者)。

本書は原本全40章で上下両編に分かれる。光緒丁酉(1897年)の『天津日日新報』に前半を発表した。南方革命後に北京天津上海の出版社が抄録して鉛印、石印、小本に印刷して原文を分断し改変した。弊社はそれを遺憾なことだと考え特に原本両編を探し出し一字の違いないものを刊行する。ご愛顧をお願いしたい〔此書原本共四十章分上下両編。在清光緒丁酉歲將全書之半披露於天津日日新報。南革後京津滬書坊摘抄印成鉛石印小本並將其原文割裂改道。／本公司以是為之憾。特覓得此兩編之原本印行公之同好一字不漏。願愛諸君覽別是幸〕

出版元による宣伝文であることを心得て読む必要がある。虚偽を含んでいるという意味だ。個別の真偽を区別しなければならない。

光緒丁酉(1897年)の『天津日日新報』に前半を発表したと説明する。「新報」は「新聞」の誤り。誤植であるにしても1910年代の時点で『天津日日新聞』それ自体を出すのはきわめて稀だ。現在でも新聞名を天津『日日新聞』と誤記する中国人研究者は多い。はるか昔にほぼ正しい新聞名を書いているのはめったにない。

1916年初版の表紙にはこの「注意」は見えない。1934年二十六版あるいは1937年二十九版にもない。少なくとも1922年十八版と1923年十九版には存在する。

傅幼圃は「老残遊記下編序」において『天津日日新聞』を提示した。それを表紙の「注意」に引用したと考えられる。その時編集者が新聞掲載の年について「清光緒丁酉歲」と余計な字句を挿入した。『天津日日新聞』は事実だが掲載を1897年とするのは嘘である。

「南革」は「老残遊記」の中で「北拳」とともに使われる。小説内では南方の革命運動を指す。表紙の「注意」に使用してここでは辛亥革命を言っていると考えていいだろう。北京天津上海の出版社と続ける。

当時『老残遊記』を刊行した北京の出版社は見当たらない。天津であれば孟晋書社の活版本がある。1906年だから辛亥革命以前だ。説明と矛盾する。百新公司の編集者が孟晋書社本を知っていたかどうかはわからない。上海で出た小本といえば商務印書館1913年本だ。

この京津滬は通常の用法で中国大都市という意味なのだろう。厳密なものではない。一方で百新公司は原本を入手して本文を厳格に校正したことを宣伝する。

「注意」のなかで提示する掲載年が事実ではない。丁酉1897年にわざと誤ったのは奥付に原著者洪都百練生に添えて「著述於清光緒丙申年山東旅次」と記したからだ。胡適の指摘した箇所である。丙申1896年の執筆にして発表年との整合性をとろうとしたと思われる。予言の書であることを強調したかった。わかっているから記事の信憑性が低下するのもしかたがない。

傅幼圃「老残遊記下編序」を読めばそこから貴重な証言をいくつか抽出することができる。

次のように書く。洪都百練生著「老残遊記」は『天津日日新聞』にははじめは連載された〔洪都百練生所撰老残遊記始披露於天津日日新聞報

陸続登載]。著者名も「新聞」も正しく表示している。

その序文執筆の日付は「民国元年歳在壬子嘉並月望日(旧暦十二月十五日[1913.1.21])」とする。1916年出版の書籍につけたに於ては新暦1913年の序ではだいたい時間差が生じている。その時間差はどうして生じたのか。理由はあるのだ。

上編には錢啓猷序が収録されている。その日付は「中華民國五年六月」だから1916年8月刊行と矛盾しない。

『天津日日新聞』に言及しているのが異色である。ただし天津・孟晋書社と初出の『繡像小説』には触れない。不徹底だからやや不可解だ。ここで初版表紙左側にある「与期刊本不同/購閱者注意」が手がかりになる。「期刊」は初出の『繡像小説』を指す。それとは百新公司の内容が異なると注意をうながす。すなわち雑誌初出では原稿第11回が没書にされていることを知ったうえで書いている。1916年に初出の『繡像小説』とのちに単行本の内容が異なるなど知る人は本当にわずかだ。よほど事情を知る人だとわかる。それには事情があるのだ。

「老残遊記」が『天津日日新聞』に掲載されていた。それを把握している人は当時としては劉鉄雲の関係者以外にはほとんど存在しないといっている。それを序で書いているからには百新公司主任徐鶴齡(該書奥付に校閲者と発行人として記述される)からも事情を聞いたのだろうと推測される。

傳幼圃の説明のおおよそは次のとおり。

傳幼圃は『老残遊記』を愛読し自分で注釈をつけていた。壬子(1912)年に上海で百新公司主任徐君(注:鶴齡)と話したおり「老残遊記」の話になった。彼(徐鶴齡)が探して入手した原稿は上下編だ[弊公司覓有原稿係上下兩編]という。傳幼圃は下編を読んで興味深く感じたので評語をつけて出版を勧めた。

傳幼圃の序が壬子となっているのは徐鶴齡と

面談した時間をもとにしているとわかる。ふたりが会って話したのは事実だろう。少なくとも百新公司本が刊行された1916年以前だ。その年壬子が本当かどうかは本人にしかわからない。

壬子1912年以前の『老残遊記』単行本といえば天津・孟晋書社、上海・商務印書館(1907未確認)、上海・神州日報館(1907未見)などがある。傳幼圃が書いた時間が正しいとすれば以上のいずれかを読んでいたことになる。

傳幼圃が上で述べているなかで興味深いのは下編原稿がすでにあるという箇所だ。上編の原稿というのも気になる。

それにしても後版の表紙に「劉氏原本」と記す不可思議さは消えることがない。著者はただ洪都百鍊生とのみ名乗っていた時代のことなのだ。著者が劉鉄雲であることを知っていなければ「劉氏原本」とつながらない。事実を把握していたからこそ「劉氏」と『天津日日新聞』を出してきた。劉氏どまりで鉄雲まで明示しない理由はなにか。説明がないから知りたいと思う。

### 劉大紳の証言

贋作に書かれた序文などどうせでたらめに決まっている。そう受け取るのが普通の感覚だろう。胡適が吐き捨てるように書籍全体を偽作だと断言したではないか。

確かに胡適の指摘するように該書奥付に記述された執筆時間は間違いである。しかし傳幼圃序は当時としては異色の『天津日日新聞』を提出している。ここに注目すべきだ。胡適は該紙について自分の「老残遊記序」では何も説明していない。

傳幼圃は百新公司本が出てくる経緯についても説明した。それらを全面的に否定することはできない。

ひとりの証言者がいる。傳幼圃の記述を裏付ける説明を公開しているのだ。「老残遊記」の著者劉鉄雲の息子劉大紳である。劉家の大紳が述べるから意味がありかつ貴重な文章だ。

贋作について劉大紳が「関于老残遊記」において詳述する(「五 <老残遊記>之仿作」<sup>\*6</sup>『資料』73-76頁)。

劉大紳が最初に述べるのは海賊版の多さだ。漢口で『続老残遊記』が出ていると人から聞いた。のちに上海の某書局<sup>\*7</sup>が贋作(仿作)を作った。書名は『老残遊記続編』という。刊行前に新聞で予約を募集した。劉大紳が問い合わせると彼らは二集(二編)が実際に存在することを知らなかった。劉大紳もそれが贋作であることを知らなかった(『資料』73頁)。

この某書局とは百新公司を指すことは容易に了解できる。

以上の説明からわかることは以下のとおり。

百新公司が最初計画していたのは『老残遊記続編』だ。初集(あくまでも二集との対比でいっている)とは別に続編を新たに書き下ろしていた。百新公司の社長、編集者はもともと洪都百鍊生が劉鉄雲だとは知らない。劉鉄雲自身が本名が知られることを希望しなかったし彼の子孫つまり劉家の人々は実名を出さないように努力をしていた(劉大紳説)。表面に出ているのは筆名の洪都百鍊生のみである。百新公司側に見れば著者不明だから続作の許可を(意志があったとして)得ることもできない。そこに劉鉄雲の息子劉大紳から抗議を受けた。百新公司の人間は関係者が実在すると知って驚いたことだろう。劉家と交渉の結果、出版社は最初の計画を変更した。初集と続編を同時に刊行するという流れだ。

### 劉大紳と百新公司の人々

劉大紳の説明は続く。

出版社の社長が釈明にやって来た。すでに多くの予約応募があり広告費も巨額にのぼる。発売中止となると赤字になってしまう。再三許しを求めると劉家の「真本」を刊行して報酬も出すという。劉大紳に見れば続編を禁止する理由はない。そこで約束を交わした。(贋作に

ついて)「洪都百鍊生」名を使用することは許さない。「二編」「二集」も同様に使用禁止とする。主編傳(注:幼圃。「老残遊記下編序」を書いた人物)をよこして相談した。傳幼圃が3度目の訪問時に本文の照合を行なうために初集切抜き本<sup>\*8</sup>を借りていった。その後初編と贋作を刊行し各20部を送ってきた。劉大紳は報酬を断り刊行物だけを収めた(『資料』73-74頁)。

人物の特定をする。劉大紳がいう出版社社長というのは百新公司の徐鶴齡だ。傳幼圃がいう主任と同一人物だろう。

劉大紳は主編が傳幼圃だと書いている。また面談もした。ここは傳幼圃序の記述と微妙にずれる。傳幼圃は劉大紳に会ったとは述べていない。傳幼圃が自分で劉大紳と直接交渉をした事実は伏せておきたかったのか。あるいは書かないように言われたのか。劉大紳の名前を出すことが出来なければ面談について触れないのも理解できる。

傳幼圃は『色欲宝鑑』百新公司1914.7、『風流皇帝』百新公司1916.4、『中国痛史』新華書局1927、百新公司また傳幼圃著、徐鶴齡校『色情之男女』上海・百新公司1931.8三版/1935.5再版などを出す。

傳幼圃は作家だったが百新公司の編集者だと劉大紳が勘違いした可能性もある。あるいははじめは編集者で後に作家となった。または編集者と作家を兼ねていた。不明のままにしておく。

百新公司が最初に立てた計画は前述のとおり続編のみを出版することだった。初集の刊行は考えていなかった。劉大紳からの抗議があつて「真本」すなわち初集20回ならびに続編(贋作)を同時に刊行することに変更した。ここで重要なのは該書が劉鉄雲の本物を含んだ『老残遊記』である点だ。

「二集」「二編」および「洪都百鍊生」<sup>\*9</sup>の名義を使用するなど劉大紳が申し入れた。そこをもういちど見る。



劉大紳は「老殘遊記」について「初集」といわない。初出の『繡像小説』『天津日日新聞』ともに「初集」という単語は使っていないからだ。ただし「二集」の方は「老殘遊記二集」と表示がある。

贋作はたしかに「二集」「二編」を使用していない。「下編」である。ここは劉大紳との約束を守っている。ここで当然な疑問が出てくる。劉大紳は徐鶴齡に劉鉄雲が執筆した「二集」がすでに発表されていると説明しなかったのだろうか。それについては記述がない。百新会社が独自に続編を刊行することを容認したことだけがわかる。

もうひとつの約束である「洪都百鍊生」については微妙である。

劉厚沢はそこに注22をつけて説明する。贋作に「鴻都百鍊生」名義を使用することは許可しないという点は口約束だったから事実上は守られなかった(『資料』100頁)。

劉厚沢の注釈では百新公司本は原作者についての約束を守らなかったとある。最初から贋作を含めた全体を洪都百鍊生でくくったかのように書いている。このような説明が百新公司本に対する悪印象を増加させた要因のひとつだ。これについては私は異議をとない。もう少し細かく検討する必要がある。

上編は洪都百鍊生の著作だから奥付に「原作者：洪都百鍊生」と表示する。当然のことだ。ここは約束違反ではない。洪都百鍊生は『繡像小説』と『天津日日新聞』に掲げられている筆名だ。従来から使用されており当時すでに一般常識になっている。

だが下編が問題となる。「続編」すなわち贋作については洪都百鍊生を使うなという劉大紳の要求だった。百新公司はそれにどう対応したか。

1923年十九版下編の奥付に「著者：前人」と記述してある。また劉徳隆は1916年初版について奥付の著者は「前人」だと書いた。孔夫

子旧書網に掲げられた1922年十八版も同じく「著者：前人」とする。前述したように初版影印本には奥付がない。ただし劉徳隆の記述ほかからして初版も「著者：前人」とあるだろう。

普通に読めば上編の洪都百鍊生と同じことだ。しかし洪都百鍊生という文字は確かに使っていない。名前の特定できない古人であるという意味にもとれる。わざと曖昧にしたといえるだろう。贋作に洪都百鍊生は使用していないと百新公司は言い逃れることができる。それにしても「著者：前人」というのは巧妙ということになるのか。苦しい処置だった。劉大紳との約束に従おうとする百新公司側の誠意だと受け止められなくもない。

以上の状況を見れば百新公司は初期の段階で劉大紳との約束をほぼ遵守しているといっていだろう。初編続編の各20部を受け取った劉大紳は作者名表示については何も書いていない。

「著者：前人」なら許容範囲内だと考えたか。

のちに刊行された贋作は全体を劉鉄雲名でひとくくりにした。時間が経過して最初の約束がなし崩しにされたからだと思う。そこまで広げて批判することはできない。

いうならば1923年十九版に「劉氏」と提起されたことでさえ当時では大きな情報開示だ。なにしろ筆名の洪都百鍊生しか知られていなかった時代である。

### 劉大紳の傳幼圃觀

劉大紳の傳幼圃贋作に対する評価は高い。

「註三 傳君の作品は相当な価値がある。私たち兄弟は傳君の公明正大さに敬服している。また権限を持つ人が続編を重版する時には傳君の本名を入れることを強く願う。また傳君の序文も入れて埋没するのを免れればこの文字の因縁も将来は美談となるであろう〔註三 傳君所作、亦自有相当価値。紳兄弟于敬佩傳君光明磊落外、並甚願有權者再印該続編時、易入傳君真名。並將傳君声叙之文附入、既免埋没、且留此

一段文字因縁、可為将来嘉話也]」(『資料』75-76頁)

傅幼圃とは直接会って交渉をしている劉大紳だ。続編の内容についても助言をしたという。劉大紳の傅幼圃に対する好感があふれていて率直な感想だと思う。この手放しの賞賛を読めば続編の作者は傅幼圃だとするの間違いはないだろうと考える。

百新会社が贗作『老残遊記』の刊行を準備していたときの話だ。劉大紳の兄である次男劉大黼がそれを聞きつけ問いただした。事情説明を受けた結果彼も承認した(『資料』74頁)。

「私たち兄弟」というのは劉大紳と劉大黼を指す。ゆえにこの贗作はまさに劉家公認の出版物ということになる。ここは肝心なところだ。批判されなければならない書物ではない。

### 劉厚沢の陳蓮痕説

劉大紳のちに青島『新語』副刊に傅幼圃が文章を書いて続編を執筆した経過を説明しているのを読んだ(『資料』74頁)。

傅幼圃が書いた文章に執筆したとあるのだから続編の著者である。

ところが劉厚沢は違う意見を注釈に述べている。

すなわち1927年に青島『新魯日報』に「新語」副刊があった。編集者の陳蓮痕が若いときに『老残遊記』続編を代筆した(為人捉刀続<老残遊記>)ことを述べているという。だから続編の作者は陳蓮痕であって傅幼圃は批注を施したにすぎない。ただし陳蓮痕と傅幼圃が同一人物であるかどうかはわからないと(『資料』100頁)。

掲載紙欄は同じ「新語」であるにもかかわらず意見が一致しない。劉大紳は傅幼圃だといひ劉厚沢は陳蓮痕だったと書く。陳蓮痕の代筆が事実だとすれば劉大紳の勘違いになる。

ここでもう一度傅幼圃「老残遊記下編序」を取り出す。

傅幼圃の説明によると徐鶴齡と話した時にはすでに下編原稿があった。前出のとおり「弊社が探して入手した原稿は上下編だ」と記す。それと劉厚沢がのべる陳蓮痕の代作という文章が一致しそうだ。代筆というから徐鶴齡が陳蓮痕に執筆依頼して続編を用意していた。それを傅幼圃が見た。また原稿上編というのは『天津日日新聞』切抜き本だ。劉大紳が提供した。ここは劉大紳の証言と合致する。

陳蓮痕はのちにいくつもの作品を書いている。

陳蓮痕(原名燕方)は『新魯日報』『新魯月刊』の主筆をつとめたという。魏紹昌主編『民国通俗小説書目資料彙編』(2014)<sup>\*10</sup>には次の目次を収録する。『京華春夢録』上海競智圖書館1925.3、『順治出家』上海大達園書供応社1935.7、『乾隆休妻』同左1935.12、『雍正奪嫡』同左1936.4、『同治嬖院』上海広益書局1937.4再版。

陳蓮痕ならば「老残遊記続編」原稿を代筆したかもしれない。そうすると執筆したのは傅幼圃だと考えていた劉大紳は誤解していたのだろうか。新しい資料がないので記述はここまでにする。続編の原稿について陳蓮痕と傅幼圃がどのような役割分担をしていたのか詳細は不明である。

贗作作者が傅幼圃であれ陳蓮痕であれ劉家が公認した刊行物であることに変わりはない。

### ふたたび胡適について

アメリカから帰国した胡適がこの贗作『老残遊記』百新公司本を読んでいるのは確実だ。「老残遊記序」を書く前である。だから「序」において該書が贗作だと指摘することができた。胡適は「老残遊記」の作者洪都百鍊生が誰なのかを以前から探索していた。「老残遊記」が「劉氏原本」であり『天津日日新聞』に掲載されたことを知る材料のひとつになったのは百新公司本の存在だったに違いない。

書いておかなくてはならないことがある。胡

適が百新公司本によって「劉氏原本」と『天津日日新聞』の存在を知ったからといって書物の実物を入手することとは別問題である。『天津日日新聞』連載の実物あるいは孟晋書社本を指している。一般に出まわっている普通の刊本ではない。新聞は入手しにくい。孟晋書社は天津の出版社だからこれも大量に刊行したとは考えられない。

胡適の「序」には『繡像小説』も『天津日日新聞』にも言及はない。沈黙した。実物で確認することができなかつたからだろう。ゆえに「老残遊記」について『繡像小説』連載と『天津日日新聞』掲載には回数に異動があることも気づいていない。

普通の「序」ならば「老残遊記」執筆発表の経緯を具体的に説明するだろう。しかし胡適の興味はそこにはなかつた。

胡適「老残遊記序」の章だてが彼の興味のありどころを示している。すなわち「一 作者劉鶚の小伝」「二 老残遊記裏的思想」「三 老残遊記の文学技術」だ。「老残遊記」の執筆公表過程についてはなにも記述しない。そこまでの知識はなかつたとわかる。

胡適はあるべき版本説明をせず唐突に1919年版を提出して偽作だと断言した。偽作のみを特別に取り上げて否定する意味があつたのだろうか。疑問を感じる。

胡適は贋作について劉家との関係、あるいは具体的な事情をまったく知らなかつた。真相は劉家公認の贋作だつたのだ。そこを見逃した。たしかに劉大紳の「関于老残遊記」が発表されるのは時間的にいえば胡適序よりも後のことだ。事情を知らなかつたから無理もないともいえる。しかし劉鉄雲初集を含んだ百新公司本を唐突に取り出し全体を偽作と決めつけたのは軽率な判断であつたといわなければならない。

#### 最後に汪原放「校読後記」

同書所収の汪原放「校読後記」についてひと

こと。

汪原放が本文を校閲した際に初出を参照した形跡はない。彼は本文確定に使用した版本を次のようにあげる。商務印書館鉛印袖珍本、広益書局石印本、泰東図書館標点本、「照原稿本」40回本(注:百新公司)などだ。各種版本は商務印書館本を種本に使用していると指摘する。『天津日日新聞』あるいは孟晋書社本をあげない。

例として2カ所の漢字違いを示している。それらを次の版本と比較対照してみる。記号は次のとおり。商=商務印書館、天=天津日日新聞、百=百新公司、胡=胡適

**第2回** 商:上船進去(天:下船進去/百:下船進去) → 胡:止船進去(注:商務の間違い。胡適の訂正は不適切)

**第12回** 商:却正是的湾子(天:却正是個湾子/百:却正是的湾子) → 胡:却正是[河]的湾子(注:商務の間違い。胡適の訂正は不適切)

上の2カ所を見ても適切な校閲にはなっていない。その原因は初出を知らないからだ。

亜東図書館本『老残遊記』は1925年初版より1934年には第10版を刊行している。有名な版本のひとつである。しかし汪原放の文章からもわかるように『天津日日新聞』本を見ていないのはやはり小さくない問題だ\*11。 罫

#### 【注】

- 1) 阿英「老残遊記版本考」は「関于老残遊記二題」に収録。『小説二談』上海・古典文学出版社 1958.5. 61-62頁。初出は魏如晦(阿英)「関于『老残遊記』両題」『宇宙風乙刊』第31期 1940.10.16
- 2) 劉徳隆「《老残遊記》版本概説」『清末小説』第15号 1992.12.1. 41頁。劉徳隆『劉鶚散論』

- 昆明・雲南人民出版社1998.3所収。また孔夫子旧書網参照
- 3) 朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』上海・学林出版社1993.2。216-217頁。別に1911年新開設とする文献もある。「1911年上海書業名録」汪耀華編『上海書業名録(1906-2010)』上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2011.6。8頁
- 4) 樽本照雄「劉鉄雲の写真をめぐる」『清末小説二談』2017.2.1ウェブ公開
- 5) 劉鶚著、劉徳隆編『抱残守缺齋日記』上海世紀出版集團、中西書局2018.6に収録する。「鉄公遺象」の裏には劉大神の筆で「先大夫鉄雲公遺像」と書いている。劉大神が所有していたとわかる。以下にも収録する。劉蕙孫子女編『翰墨清芬——劉鶚、劉大神、劉蕙孫三世手迹輯存』私家版(壹号文化伝播有限公司印刷制作 2014)、劉蕙孫子女編『余瀕集——劉成忠、劉鶚、劉大神、劉蕙孫四世詩存』私家版(壹号文化伝播有限公司印刷制作 2016)
- 6) 「關於老殘遊記」。署名は紳『文苑』第1輯1939.4.15。のち『宇宙風乙刊』第20-24期1940.1.15-5.1に再掲載。また魏紹昌編『老殘遊記資料』北京・中華書局1962.4(ほどこされた劉厚沢注が貴重。日本影印あり。『資料』と称する)、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老殘遊記資料』成都・四川人民出版社1985.7などに収録される。ただし後者は原稿の複写によっており注のつけ方など『資料』所収とは異なる。
- 7) 「某書局」とするのは初出。『資料』73頁も同じ。ただし『劉鶚及老殘遊記資料』399頁は「百新書局」とする。
- 8) 劉家では初集について『天津日日新聞』切抜き本を20部所有していたという(註一)。「關於老殘遊記」執筆時には2部があると書いている。ただし孟晋書社の単行本について劉大神の言及はない。その存在を知らなかったかもしれない。もうひとつ。二集が問題だ。劉大神は二集が『天津日日新聞』に掲載されたことは知っている。ただしその記憶が初集と混同しているといわざるをえない。考えれば二集そのものを手元に所有してい

なかったと思われる。だからこそ百新公司の続編刊行を許可したのではないか。二集を所持していれば初集と同じように百新公司に提供するだろう。二集の実物を提供することができないから劉大神は百新公司続編の刊行を認めたと推測する。

- 9) 初出のまま。『資料』74頁は「鴻都百鍊生」に書き換えているが正確ではない。鴻都百鍊生は二集で使用されたからだ。『劉鶚及老殘遊記資料』も洪都百鍊生のままである。399頁
- 10) 魏紹昌主編『民国通俗小説書目資料彙編』3冊上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2014.12
- 11) 参考：樽本照雄「『老殘遊記』の版本と修改について」『清末小説閑談』法律文化社1983.9.20



『書論』第45号2019.11.30

特集 長尾雨山 狩野直禎先生追悼

- 長尾雨山を特集するに当たって …… 杉村邦彦  
『書論』第45号「特集・長尾雨山」に寄せて  
…… 長尾進一郎  
父長尾正和が願った事 …… 森井裕子  
「長尾雨山関係資料」のこれまでとこれから  
…… 吳 孟晋  
長尾雨山と書画文墨趣味ネットワーク …… 松村茂樹  
長尾雨山と儒葬——朱熹『家礼』の実践 …… 吾妻重二  
夏目漱石と長尾雨山・森鷗外と黒木欽堂 …… 田山泰三  
讃岐における長尾雨山の交友と書碑 …… 太田 剛  
長尾雨山と山本竟山 …… 蘇 浩  
長尾雨山と庄司杜峯——「庄司喜孝翁追思碑」と  
「南無杜峯仏」をめぐる …… 杉村邦彦  
長尾雨山略歴 …… 杉村邦彦  
三野二山の生涯と長尾雨山・大西見山との交友(1)  
…… 田淵元博  
長尾雨山京都在任期初期の詩文詠作——『京都日出  
新聞』の記事を主な資料として …… 柴田清継  
雨山と木堂 …… 金地真司

次号の公開は2020年7月1日を予定しています  
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>



「(渡辺浩司) 破天荒生「空中戦争未来記」『冒險世界』第1巻第5号 博文館1908.5.5」。その通り。ただし渡辺浩司による底本の指摘がなされるのは樽目録X (第7版2015) からである。

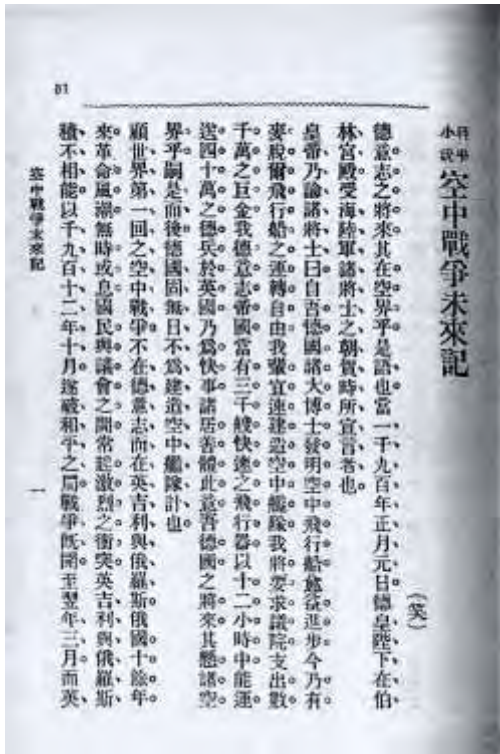
天笑漢訳は章に分けない。ゆえに日訳にある章題も漢訳しない。冒頭部分を次に示す。

包天笑「空中戦争未来記」など(下)

荒井由美

[天笑] 德意志之将来。其在空界乎。是語也。當一千九百年正月元日。德皇陛下在伯林宮殿。受海陸軍諸將士之朝賀時所宣言者也。／皇帝乃諭諸將士曰。自吾德国諸大博士發明空中飛行船。愈益進步。今乃有麥脫爾飛行船之運轉自由。我輩宜速建造空中艦隊。我將要求議院。支出數千萬之巨金。我德意志帝國。當有三千艘快速之飛行器。以十二小時中。能運送四十萬之德兵於英國。乃為快事。諸君善体此意。吾德国之将来。其懸諸空界乎。嗣是而後。德国固無日不為建造空中艦隊計也。

「ドイツの将来は空界にあり」との言葉は、1900年正月元日、ドイツ皇帝陛下がベルリン宮殿において海陸軍の将官の年賀を受けられた時に宣言されたものである。／皇帝は将官に次のように言われた。「わがドイツの大博士たちが発明した空中飛行船はますます進歩している。今、モートル飛行船の運轉は自由になった。我々が速やかに空中艦隊を建造するため我は議院に数千万の巨金を要求するであろう。我がドイツ帝國は3千艘の快速の飛行器を持たねばならない。12時間の間に40万のドイツ兵を英國に送ることができる。すばらしい。諸君その意義を理解せよ。我がドイツの将来は懸かって空界にあり」と。その後、ドイツは空中艦隊建造に邁進した。



g 笑(包天笑)「(科学小説) 空中戦争未来記」『月月小説』2年9期(21号) 戊申9(1908.10) (略称 [天笑])

笑と作者名があるだけ。掲載雑誌には翻訳を示す説明と記述はない。これでは包天笑の創作だと勘違いする。「リライト」したという説が生まれる\*11。

樽目第11版(K0310\*)に注釈がついている。

天笑の漢訳は日訳をほぼふまえる。大要は把握しているといえる。

「空界」「正月元日」「伯林宮殿」「空中飛行船」「麥脫爾(モートル)飛行船」「空中艦隊」「飛行器」などの単語が一致しているところに注目する人もいるだろう。それはそうだ。包天

笑の翻訳手法はよく知られている。日本語でしかも漢字を多く使用した題材を好んで選択した。日本の漢字を手がかりにして漢訳したと自らが述べている。別に特別な手法ではない。日本語からロシア小説を漢訳した呉構がいる。日本に留学していないが日本語を理解した。印刷されている日本語にもとづいて漢訳をしたのだ。

ここからが包天笑の問題だ。

天笑が底本にした破天荒生の日記には要約があることを紹介した。くり返すと「独逸人の夢＝二十年後の世界＝空中艦隊伯林を襲ふ＝日本の未来は如何＝北極の納涼＝空中巡查＝印度征服＝支那征服」である。

どこが問題かといえば日記に「日本」と「支那」が出てくることだ。破天荒生による加筆ではない。マーチン原作がそう書いているのを要約した英文にあるのだ。

該当箇所を含む部分を再度抽出する。それに対応する天笑漢訳を示す。

[破天] 世界第一回の空中戦

露国は昔の如く革命騒ぎに歳月を送つて居つたが、国民と議会との間に激しい衝突が起つたに際して、日本帝国は千九百五年以来常に求めつゝあつた露国と開戦するの機会を造つて、千九百十二年十月を以て第二日露戦争を宣言した、其の翌年三月ゴビ砂漠に於ける大戦争に依て、露国全軍は悉く降参し、日本は再び大捷利を獲た、日本軍は此戦争に空中戦闘艦、空中輸送列車を使用して、露軍を打破つたので世界を驚倒せしめた。

[天笑] 顧世界第一回之空中戦争。不在德意志而在英吉利与俄羅斯。俄国十余年来。革命風潮。無時或息。国民与議会之間。常起激烈之衝突。英吉利与俄羅斯積不相能。以千九百十二年十月。遂破和平之局。戦争既開。至翌年三月。而英俄大戦於戈壁沙漠。俄国全軍覆没。英之勝。得力於空界。英軍蓋使用空中戦闘艦。与空中輸送列車。以是足以敗俄也。

世界第一回の空中戦争を振り返れば、ドイツ

ではなくイギリスとロシアであつた。十数年来ロシアでは革命騒ぎが止むことなく国民と議会の間には常に激烈な衝突が起つていた。イギリスとロシアは日ごろから不仲で1912年10月になつてついに開戦した。翌年3月イギリスとロシアはゴビ砂漠で大いに戦いロシア全軍は壊滅した。イギリスの勝利は空界で強力であつたからだ。イギリス軍は空中戦闘艦、空中輸送列車を使用してロシアを破つたのである。

包天笑は漢訳にあたり日記の概略ははずしていない。しかし顕著な相違がある。天笑漢訳は日記の「日本」をすべて「英吉利 (イギリス)」に置き換えた。日本を抹消してイギリスとロシアが戦争することにしてしまった。

日記と漢訳ともに英文要約から離れている箇所を取り出して見る。

[英文] 250 MILES AN HOUR

…… By 1915 motor-air-ships had attained a speed of 187½ to 250 miles an hour. From Suwarow's air-ship station in Khokand, to Peking, was not quite 2,200 miles—a nice little air-trip of ten hours. So it came about that the summer of 1915 saw Michael Suwarow with three battle-air-ships (中略) and one Zeppelin air-train, hovering at 5,000 feet above the golden roofs of Peking. Leaning on the gilded aluminium bulwarks of his stately air-ship, he planned his conquest of the age-old Chinese Empire.

1時間250マイル

……1915年までにモートル空中船は1時間187マイル2分の1より250マイルの速力を達成した。(ウズベキスタンの) コーカンドにあるシュワローの空中船係留場から北京まで2,200マイルほど——10時間のすばらしい空中旅行であつた。そうして1915年の夏、マイケル・シュワローは空中戦闘艦3艘(中略)とツェッペリン式空中列車1艘とで金色燦爛たる北京の頭上から5,000フィート上空を停空飛翔した。彼の荘厳な空中

船のアルミニウムでメッキした囲いに寄りかかりながら大昔からの支那帝国を征服する計画を立てたのである。

ロシアのシュワローが計画したのは the age-old Chinese Empire (大昔からの支那帝国) の征服であった。それを実現するための偵察飛行である。ここはロシアの清国に対する侵略支配願望を露骨に表示した場面だ。ドイツ人のマーチンにとってはそう書くことは自然の流れだった。

そのまま翻訳すればなんでもなさそうな英文要約だ。しかし破天荒生は何を思ったのか前後を入れ替えて訳した。

[破天] 一時間二百五十哩

其後スワロウは支那帝国征服を思い付いて、一時間百七十八哩二分の一より二百五十哩の速力を有するモートル空中船を發明し、此大艦隊繫留場コーカンドよりヘーゲンまで、二千二百哩を十時間で飛んで行く大計画に着手した。

飛行船の速度、距離、所要時間などの数字は英文どおりに翻訳している。しかし固有名詞の書き間違いがある。「ヘーゲン」とはなにか。破天荒生は英文要約に Peking とあるのを勘違いしたらしい。「支那帝国征服」と書いているのだから地名を誤記するのは理解しがたい。

シュワローが北京上空において実際に飛行船を浮かべているのが英文要約である。破天荒生はそれを将来の計画にしてしまった。

天笑の手になると上の日本語が次のような漢訳になる。

[天笑] 此時空中飛行船之速力自小時一百七十六英里增至二百英里。蓋在斯威露之意。將自大艦隊繫留場之苛更特地方。至於海根以十小時行二千二百英里。以其計畫。良非一日矣。

その時飛行船の速力は1時間176マイルから200マイルにまで増加した。さてスワロウの考

えでは大艦隊係留場コーカンドからヘーゲン(海根)までは10時間で2200マイルに行く。その計画は一日でできるものではない。

破天荒生が「スワロウ」と日訳した。それをそのまま「斯威露」と音訳しただけ。また北京を「ヘーゲン」と改変したから天笑がそれを音訳して「海根」だ。底本が間違っているのだからしかたがない。天笑漢訳で時速の数字が日訳と異なっている。ただの勘違いだろうか。

それよりも重要な変更は「支那帝国征服」という箇所を抹消したことだ。天笑は中国人として将来祖国が征服の対象になるという物語を受け入れたくなかったらしい。

日本について削除する例を示す。

[英文] 4,000,000 AIR-SAILORS

..... The Peace of Tomsk (1916) gave to Japan all Siberia east of the Yenesei, which kept that lower quiet.

4百万の空中兵士

.....1916年のトムスク条約によりエニセイ川以東の全シベリアが日本に与えられ安寧が保たれた。

トムスクはシベリア西部に位置する。エニセイ川 (the Yenisei) だから英文の Yenesei は誤植だろう。

[破天] 日本の未来は如何

.....日本国は千九百十六年トムスク条約に依てイェ子サイ以東のシベリヤを領有することとなり、強国中最も安穩のもので

破天荒生の日訳は英文のとおりだ。包天笑は次のように漢訳したから興味深い。

[天笑] .....此時吾中国亦雄飛於地球。以千九百十九年吐莫斯苦条約。遂奄有亜洲之西伯李亜地。為強国中之最安穩者。

……この時我が中国もまた世界に雄飛した。  
1919年のトムスク条約によりにわかにはアジアの  
シベリアを領有することになり強国中最も安穩  
のものとなった。

まず日本語訳にある「日本国」を削除した。  
そのかわりに「吾中国」に差し替える。1916  
年を1919年に変更した。あとは日訳のままだ。  
天笑の操作はかなり露骨で強引だ。日本のか  
わりに中国を前面に押し出す。「吾中国」が戦  
いもせずにシベリアの地を領有することになっ  
た不合理には目をつむった。そうあって欲しい  
という自分の願望を表現したのだ。  
英文要約にはまだ日本が出てくる箇所がある。  
列強各国が他国の領土を支配する欲望を赤裸々  
にしている状況を説明する。

[英文] A GERMAN ULTIMATUM

……Japan can have all of China that she can  
get;  
ドイツの最後通牒  
……日本は得ることのできる中国全土を握るこ  
とができる。

ドイツ人マーチンは日本と中国の力関係をそ  
のように見ていた。日本が中国全土を支配する  
ことができる。

[破天] 独逸最後の通牒

……又日本は支那全国を此機会に乗じて奪ひ取  
るであらうし、  
[天笑] 削除

天笑は該当部分をあっさり削除した。それは  
そうだ。前の部分で「吾中国」がシベリアを領  
有することに変更したからそれとの整合性がと  
れなくなるからだ。

ロシア皇帝となったシュワローは狙っていた  
インドを突然占領した。イギリスはそれを阻止  
することができない。インドを救うためにドイ

ツに干渉するよう懇請してもみた。ここで日本  
の登場だ。イギリスは日本天皇（ミカド）にも  
依頼をしていた。

[英文] THE CONQUEST OF INDIA

……They have already applied to the Mikado,  
who replies that to his great sorrow he was  
just then too busy to be able to help John Bull.

インド征服

……彼ら（イギリス）は既にミカド（日本天皇）  
にも依頼をしていたのであるが、残念なこと  
にあまりにも忙しくジョン・ブル（イギリス）を  
手助けすることができないとミカドは回答して  
いる。

[破天] 印度征服

……またその前英国は既に日本帝国の干渉を依  
頼し来つたのであるが、日本国は本国の事多端  
にして他国の急を救ふ暇なしと答へ、

破天荒生は英文に忠実に翻訳している。天笑  
がどうしたかは予想がつく。

[天笑] 削除

そうなるだろう。

日本といっても次のばあいはミカドであるが、  
最後部分に注意すべき（N.B.）こととして出  
てくる。

[英文] N. B.—He has been told by Germany  
that she will respect his Chinese conquests, so  
that he is now in China conquering away for  
dear life.

注意—ミカドはドイツから中国の征服を尊  
重するといわれた。彼は今中国にいて全力を尽  
くして征服しつつある。

[破天] はそれより先独逸は日本に向つて支那の  
征服権を与へたので、日本帝国は今や支那征服  
に尽力しつつあるが、間もなく大成功をするで  
あらう。



破天荒生は取りこぼしもせずにはほぼそのままを日訳した。

〔天笑〕削除

一方の天笑はそこも無視した。

以上を見れば包天笑の翻訳姿勢がわかる。彼は日本語文献を底本として漢訳した。基本的に忠実であろうとしていることはわかる。ただし「吾中国」と日本の関係が出てくる箇所には敏感に反応した。徹底的に日本を排除したのである。日本語に依拠して漢訳しながら日本を無視する。矛盾だ。

翻訳者であるよりも愛国者としての矜持を前面に押し出した結果だ。

そうまでして漢訳を公表した考えはなにか。天笑の「序」には次のような部分がある。

我知進歩之迅。當不可以限量。則此一小篇者。誠非鑿空之談也。

進歩の速さは限度を決めることができるはずのないことを私は知っている。ならばこの小篇は絶対にこじつけの物語ではないのだ。

日訳すなわち英文要約の前半は戦争が主たる内容だ。飛行船の進歩が世界各国の戦争準備を増加させる。その結果大戦の発生と支配被支配の関係が生じる。機械の発展が社会変革の原動力になる。そこを包天笑は重要視した。

ただし底本にある日本の隆盛を記述する部分に対して包天笑は我慢することができなかったようだ。日訳(英文要約)にある日本をイギリス、中国に置き換え日本を排斥した事実から推測できる。漢訳を見ているだけでは真相はわからない。包天笑「空中戦争未来記」に言及している研究者はいる。だがこの事実を指摘した人はいない。

翻訳に誤訳はつきものだ。程度にもよるが原

作の大筋を変更しない範囲内で削除追加が行なわれるばあいもあるだろう。しかし包天笑が実行したのは底本の記述を無視して日本を排除する意図的な改竄である。作品そのものを漢訳せず公表しないという選択肢もあったはずだ。

飛行船の将来的有望性、重要性を紹介して伝えたい好奇心がある。しかし底本において活躍する日本の描写には拒絶反応を示す。この好奇心と愛国心の矛盾を同時に充足するのが漢訳から日本を排除することだった。

原文に忠実であることを翻訳の基本とするならば包天笑漢訳の問題は大きい。底本の主旨を捻じ曲げる結果となったからだ。表面的な誤訳省略加筆よりも根が深い。

h (徳)冒京著 徐鳳書、唐人傑合訳『破天荒』東亜訳書会 宣統2(1910)/上海・国光書局1910/上海・東方書局1910.2/1911.6再版/1915.1三版

徐鳳書、唐人傑のふたりはほかにも翻訳を刊行している。横井時敬著『(政治小説)模範町村』(商務印書館1908)がある。日本作品が底本だ。そこからも弦月訳『破天荒』を底本にしたと考えていいだろう。ただし該訳書は未見。読むことができないから説明はない。 ㊦

【注】

11) 武田145頁は次のように説明する。「包天笑はコメントを付して、「二十世紀は空中世界である。今年、内外の新聞を読むと、航空事業に携わるものが多いことがわかる」といっている。この作品(注:「空中戦争未来記」)もまた、航空機に関する外国の小説や論説を読んだ包天笑が、それらを彼らなりにリライトしたという印象を受ける」

MARTIN 日訳漢訳対照

×印は省略の意味

RUDOLF MARTIN	三津木春影	『破天荒』	破天荒生	垂 琛	包天笑
●I-FACTS.	×	×	×	一、緒言	×
●II - THE FANTASY OF RUDOLF MARTIN.					章題なし、冒頭の教文字を示す
GERMANY'S FUTURE LIES IN THE AIR.	独逸の将来は空中にあり	一、カイゼル陛下の予言、二、鉄艦鉄条網は無用の長物 カイゼルの予言(続き)、三、ドイツの天職 カイゼルの予言(完)	独逸の将来は空界にあり	二、德意志之空中艦隊	德意志之将来
THE FIRST GREAT AIR-BATTLES	空中大戦争亦々開始さる	四、第二日露戦争	世界第一回の空中戦	三、日俄再戦	顧世界第一回(日本書き換えあり)
SUWAROW, THE NAPOLEON OF THE AIR	空中ナポレオンの出現	五、空中ナポレオンの出現	天界の那翁=シカエル、スワロウ	四、俄国英傑之出世	自此戦争後
250 MILES AN HOUR	独露戦争	六、一時間二百五十哩——清国の危機	一時間二百五十哩	五、支那征服之野心(加筆あり)	此時空中飛行船
THE AIR-BATTLE-SHIP	同上	七、独露外交の危機	空中艦船	六、德俄外交之断絶	顧其所経営者
AIR-SHIP V. INFANTRY	同上	八、独露の血戦	空中戦と歩兵		爾時斯威露
AIR-SHIPS' RAID ON BERLIN	柏林市上の大激戦	九、露が必死の計画	空中艦隊柏林を襲ふ		自徳人以空中艦隊
THE AIR BATTLE ABOVE BERLIN	同上	十、空中大戦闘	柏林府上の大戦争		天方破曉
THE BOMBARDMENT OF BERLIN	同上	一一、柏林の惨状	柏林府の攻撃		此時斯威露
THE GERMAN EMPIRE IN 1930	×	一二、独逸の勃興	ゼルマン人種統一主義		斯威露一敗
4,000,000 AIR-SAILORS	大西洋を十時間で横断	一三、四百万の空中軍	日本の未来は如何		自惠爾遜条約(日本書き換えあり)
CROSSING THE ATLANTIC IN TEN HOURS	同上	一四、大西洋の横断十二時間	十時間にて大西洋横断		自亨宝爾克
CONSUMPTION CURED	同上	一五、肺病全癒	肺病は全治す		更有一端
BERLIN TO BAGDAD BY AIR-SHIP	飛行艇と新聞紙	一六、柏林バグダッド間空中旅行	バグダッド、柏林間の空中旅行		至一千九百三十年(日本省略あり)
NEWS BY WIRELESS TELEPHONY	同上	一七、雲際の無線電話	無線電信		同上
PICKNICKING AT THE NORTH POLE	飛行艇の兩極旅行	一八、北極の観光	北極の納涼		嘗聞諸大富豪
THE PARADISE OF MESOPOTAMIA	×	一九、メソポタミヤ楽園	メソポタミヤ		立於德意志
BERLIN IN 1930	×	二〇、三〇年に於ける柏林	空中巡査		於斯時也
HANGING-GARDENS	空中の大公園	二一、空中公園	空中公園		一千九百零七年
A GERMAN ULTIMATUM	×	二二、独逸の最後通牒	独逸の最後通牒		時刻波蘭
THE CONQUEST OF INDIA	×	二三、印度征服	印度征服		已而英徳两国(日本省略あり)
●III - WHAT IT ALL COMES TO	×	×	×		×(包天笑序言あり)

★

飯塚 容〇文明戯の映画化について 『現代中国文化の軌跡』中央大学出版社2005.3.31 中央大学人文科学研究所研究叢書36

——〇もうひとつの『姉妹花』——『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容 『中央大学文学部紀要』通号219号2008.2

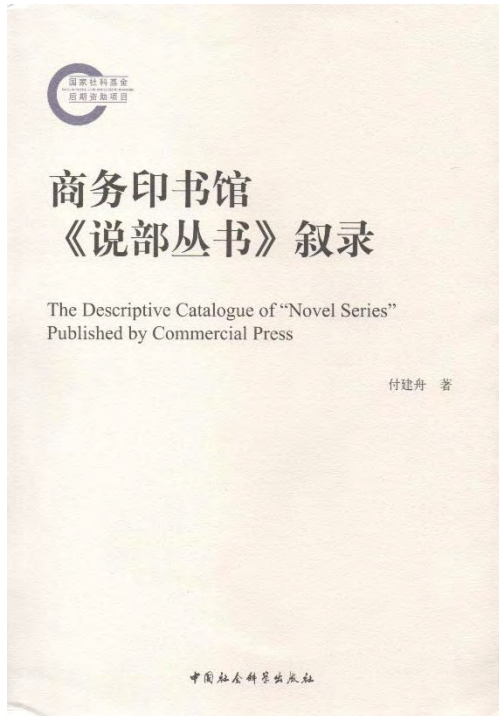
——〇もうひとつの『姉妹花』——『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容 飯塚容・瀬戸宏・平林宣和・松浦恆雄編著『文明戯研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店2009.2.27

——〇第六章 『谷間の姫百合』『乳姉妹』の変容——もう一つの『姉妹花』 『中国の「新劇」と日本——「文明戯」の研究』中央大学出版社2014.8.1

付建舟『商務印書館《説部叢書》  
叙録』について

樽本照雄

付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』（北京・中国社会科学出版社2019.8.『叙録』と称する。略号は〔付説〕）について述べる。



はじめに

付建舟が書名に商務印書館を出しているのには意味がある。

「説部」とは小説を意味する普通名詞だ。群学社、改良小説社、小説進歩社、最新小説社、太平洋学社なども「説部叢書」と称する刊行物

を持つ。ところが商務の「説部叢書」に限っては外国文学の翻訳叢書に特化させた。しかも刊行が長期間にわたっており種類が特別に多い。

「説部叢書」といえば商務印書館の刊行物を指すのが常識になっている。付建舟が商務を明記するのはその状況を知っているからだ。それら出版社の中から商務印書館刊行物だけを取り出して著述するのは適切な判断だといえる。

商務版「説部叢書」は初集から第4集第22編までの合計322種がある。これが普通にあげられる収録作品数だ。立ち入って述べればより複雑になる。元版が存在して実質は全324種だと書いても理解する研究者はごくわずかだろう。

出版元の商務印書館自身が自社の「説部叢書」について正確で詳細な記録を公表していない。中華人民共和国成立以前に刊行した販売用書目を流用して「説部叢書」の全体をあたかも示したかのように装っている。

当時は重版をくり返した。各冊の奥付をみれば多様な版数を見ることができる。それほど読者に歓迎され売れた叢書だ。商務印書館の経済的基盤は主として教科書、雑誌、叢書などによって成り立っていた。「説部叢書」はそのひとつだといっている。清末民初の知識人はそれによって海外小説の存在を知った。のちに文学者、小説家になる青年たちが吸収すべき知識源でもあった。

しかし中国では消耗品扱いのようだ。ペラペラの表紙でページ数が少なく紙質の悪い小冊子だから保存がむづかしい。それ故かだいぶ前（たぶん約30年前）から実物は入手しようとすると困難がつきまとう。市場に出てこなければ手に取って見ることもできない。図書館には所蔵されていると思う。ただし300種をうわまわる叢書を1冊ずつ閲覧請求するのは根気と体力が必要だ。

さすがに現在ではネット古書市場にいくつか見かける。その高い売値に多数の購入希望者の存在が透けて見える。高値傾向を続けているの

が現状だ。そこに目をつけて影印本も製作販売されるから商務版「説部叢書」は一部で人気の商品である。

以前は商務版「説部叢書」そのものを研究しようとする人は多くなかった。それを象徴するような書物がある。郭延礼『中国近代翻訳文学概論』(1998/修訂本2005)は近代翻訳文学の専門研究書だ。中国国内の学術賞を受賞するくらいに高く評価されている。しかし初版には商務版「説部叢書」という単語は出てこない。完全に無視された。あるいはその存在はきれいさっぱり忘れられた。

それにはほかの理由もあるだろう。

叢書に多数収録された林訳小説がある。そこから抜き出して「林訳小説叢書」100種が刊行されてもいる。その林訳が長年にわたって批判の対象となった。そのことも研究興味が希薄になった原因かもしれないと感じる。中国大陸では批判される作品を研究することは研究者自身に災難がふりかかる可能性が大きいからだ。ただし林訳のばあいは林紘を擁護しなければ問題は無い。林紘批判が学界の基本だからそれに従っていればよい。そうはいつでも林訳批判をしながら「説部叢書」の全体を探ろうという気にはならないだろう。高い危険性がともなうからなおさらだ。

それでも興味を感じる人々がいることは心強い。1冊ずつ購入してその所蔵数を誇る文章を以前に読んだことがある。ただし所蔵することと研究は別だ。翻訳叢書だから原作、原作者の探究が不可欠となる。そこまで深入りする気になる人はあまり見かけない。手間のかかるわりに期待される成果が少ないからだろう。

個々の作品は「説部叢書」を明記して清末民初小説目録に収録されるものもある。しかし合計324種とその関連書籍についてその全体をまとめて明らかにした例はほとんどないだろう。大きな謎が存在しているといつていい。

以上のような状況である。研究者が叢書の刊

行実態を知ろうと意図したとしても煩雑なことになる。

「説部叢書」収録の各作品について原作が不明のものも多い。探索する必要がある。叢書全体の成立過程になるとさらに不鮮明だ。それを解明するための資料的基礎を固めたのが付建舟の上掲『叙録』である。

全体を明らかにする作業は端緒についたばかりだ。しかし付建舟が打ち立てたその基礎作業こそが今後の研究を発展させる出発点となる。紹介したい。

### その内容

『叙録』の構成は以下のとおり。

- [日] 樽本照雄「序」、
- 例言、
- 第1章 英国作品叙録、
- 第2章 法国作品叙録、
- 第3章 美国作品叙録、
- 第4章 俄日作品叙録、
- 第5章 其他諸国与地区作品叙録、
- 附録：商務印書館《説部叢書》作品一覧、
- 参考文献、
- 後記

『叙録』の新しい工夫は原作の国別に分類しなおしたことだ。元版(付建舟の用語は十集系列)あるいは初集本(同じく四集系列)の順番に記述してあるだろうと私は思っていた。元版と初集はほぼ重なるからその順序でいい。その予測がはずれてやや意外な気がしないこともない。

分類するにはそれなりの理由があると思う。数の多い順になっているということもできる。あるいは原作の特定がある程度できているから分類することが可能になった。

目次に作品名が書かれている。また附録の「作品一覧」(526-529頁)がある。この一覧



と作品の所在が連動していたらもっとよかった。苦情を述べているのではない。そのほうが便利だろうと思うだけ。300余種のことから探す手間がかかるほどではない。『叙録』の全項目は『清末民初小説目録 第12版』(2020年1月公開)に収録した。電字版だから作品検索は簡単なはずだ。

### その特色

商務版「説部叢書」について世界で最初にまとめて紹介したのは中村忠行である。「商務版『説部叢書』について——書誌学的なアプローチ」(『野草』第27号 1981.4.20)という。そうしてその38年後に『叙録』という本格的な専門研究書が刊行された。博士論文は別にある(鄭方曉2013)。だが商務版「説部叢書」全体を元版から初集、2集(第2集ではない)、第3集、第4集と本格的に収録したのが付建舟の単行本『叙録』だ。中国人研究者によって公表されたのは慶賀のいたりである。

特色のひとつはなんといっても各作品について書影をいくつも収録していることだ。

付建舟の経眼録シリーズを知る人にとっては別に不思議ではなからう。関係書では以下の書物を刊行している。

付建舟、朱秀梅『清末民初小説版本経眼録』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6

付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1

付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』北京・中国社会科学出版社2013.8

付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』北京・中国致公出版社2015.1

付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説巻』同上

付建舟『清末民初小説版本経眼録・清末小説巻』北京・中国致公出版社2016.1

付建舟『清末民初小説版本経眼録・民初小説巻』同上

私は付建舟の著作に大きな興味を感じる。またその記述を信頼している。その理由は彼が作品そのものを見ているからだ。ページ数を記述しているのは実物で確認したという証拠である。書影を掲載しているのが読者としてはなによりうれしい。

付建舟はすでに上述の資料的な学術貢献を積み重ねている。貴重な業績だ。それらから関連する商務版「説部叢書」を抜き出した。さらに補充し補強した。書影を多数掲載するのがよい。強調しすぎることはないのだ。資料としての信憑性を高めている。

この種の書物には従来は印刷技術上の制約があった。写真は特別な凸版を作成する必要がある。その分費用が高くなる。出版社が写真を掲載することを敬遠するのも当然だ。その結果多くは説明記述だけで終始する。文字だけの解説では著者の書き誤り、思い込みで誤記している可能性を否定できない。

阿英目録(「晩清小説目」1954/1957増補版)を見てもえればわかる。利用者は阿英の記録が妥当であるかどうかを判断することができない。だが写真が示してあれば目に見える。利用者の判定にゆだねる余地を提供している。表紙と奥付が重要だと付建舟はよく理解しているというべきだ。印刷工程が電脳化された現在だからこそできる。

私が付建舟の著作に注目しているのはなによりも彼自身が刊行物そのものを手に取っているからだとくり返す。先行文献の字面を引用するだけのものではない。

付建舟は従来のあるいは一般の研究者とは異なる基本姿勢を維持している。彼は確実な根拠を示しているのだ。そこがとてもよい。

日本から現在の中国学界をながめると資料整理よりも立論を重視しているように思える。そのような大きな流れの中において付建舟の著作が刊行されること自体が珍しい。やや特別な存

在であるといってもいい。研究の基礎そのものを提出しているからだ。立論は実物を手にしてからはじめて可能となる。付建舟はそう確信しているのだろう。手元のない作品について論じることにはできない。強く深く同意する。

『叙録』のすばらしさを説明するためには阿英目録にさかのぼる必要がある。

## 阿英目録など

清末小説研究者が使用する目録は以前から阿英目録だった。ほかに目録はないことはない。だがその収録数の多さからいって第一に目を通すべき書物だ。作品対象は清末までに限っている。その特色はなんといっても翻訳小説を創作小説とは別に集めたところだ。

阿英は創作と翻訳の両輪で清末小説が動いていたと的確に把握していた。そう理解できる。ただし翻訳小説の原作までは手が回らなかった。原作は記していない。目録はその存在を記録するだけでよいという考えだったかもしれない。阿英『晚清小説史』(1937)も同様に原作品に言及しない。

中華人民共和国に「自力更生」が政治スローガンになった時代があった。自分の力だけでやっていく。外国に頼らない。それを叫ぶことが必要な時代だったのだろう。

標語だけで終わらなかった。過去に外国と関係のあった人物企業が批判的になった。

たとえば外国資本によって中国国内の鉱山開発を主張した劉鉄雲は売国奴だと罵られた。当然彼の作品『老残遊記』も売国奴が書いた小説だと批判に晒される。そればかりか子孫親族にまで政治的批判の矛先がのびた。

だがこの種の批判は非常に恣意的なものだ。対象によって扱いが異なった。

企業であれば商務印書館である。清末民初の実質10年間日本の金港堂と合弁企業だった事実がある。なにしろ「説部叢書」最初の第一編は柴四郎『佳人奇遇』だし第二編は矢野文雄『経

国美談』にほかならない。日本の影が濃い。1910年代は日中合弁会社を理由に中華書局から激しく攻撃されたのだった。

だから「文化大革命」時も当然非難されはすだ。ところが日中合弁の事実が長らく隠蔽されていたためか表立って批判されたようには見えなかった。内部ではどうだったか知らない。あるいは政治的な判断があったものか。

現在も金港堂との合弁企業であった事実を知る人は少ない。金港堂との合弁を詳述した拙著『初期商務印書館研究』(2000)は商務印書館から漢訳刊行される話があったが結局は立ち消えて実現しなかった。真相を公表することは嫌われたということらしい。

一方で影響を受けたのは翻訳文学研究だった。そう私は考えている。外国からの影響を極力否定したのだ。つまり翻訳小説を排除する方向へ学界が動いていたことをいう。その証拠に1957年以降阿英目録を増補する人はいなかった。私の把握によれば「文化大革命」を経て少数を補足した論文ならば書かれたことはある。しかし基本的に創作部分だけだった。しかも発表されたのは論文であって単行本規模ではない。阿英目録が再版されることもなかった。完全に放置されたという印象だ。「翻訳文学は中国文学ではない」という考えが中国学界に根深く存在していたのも関係しただろう。

翻訳研究に新しい動きがでてきたのは「文化大革命」後の1981年になってからだ。

馬泰来「林紓翻訳作品全目」(錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.1)が林訳作品の原作を明記して登場したのが画期的であった。アメリカから来たというのがひとつの衝撃だ。国別、作家別に分類し原作についてそれまでの誤りを多く訂正し新しく作品を特定した。それ以降、林訳の原作については馬泰来目録を引用することが定着している。

あとは日本で刊行された『清末民初小説目録』(1988)になる。該目録の後版では各作品の

ひとつひとつについて先行文献を典拠として明記した。当然ながら馬泰来目録も吸収している。それまでに判明した原作についても注記することにつとめた。ただしそれらは日本で出版されたから中国人研究者は知らない。気づいたとしたら樽本『新編増補清末民初小説目録[第3版]』(齊魯書社2002)からだろう。

清末までに限定した陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014.1)は分量からいっても巨大出版物だ。まことに充実している。賞賛に値する。私はそう書くことに躊躇しない。ただし翻訳小説について原作を明記していないことは言うておく。原作の特定よりも年表としての事実確認に重点を置いたと思われる。

ほかにも翻訳小説目録と称する刊行物がある。すでに明らかにされている原作すらも複写しない種類の目録だ。ここでは取り上げない。

以上の流れのなかに付建舟の経眼録シリーズを置くと興味深い。書影を掲載するほかに原作を明記する努力をしているのがよい。

### 特色のつづき

阿英目録に言及したのはには理由がある。収録範囲は清朝末期までで止めている。中華民国初期は含まない。「説部叢書」は清末に刊行がはじまり民初に継続されている。すると阿英目録でその動きを跡付けようとすると中途半端に挫折する。

「説部叢書」は最初は全十集で構成される。元版(十集系列)である。各集十編で全100編となる。それが初集(四集系列)と改称されるのは民国後だ。その変遷が阿英目録では追跡できない。残念である。

それよりも大きな問題がある。阿英目録が「説部叢書」などの叢書名を採録していないことにつきる。これは困る。

商務印書館が清末に刊行した翻訳小説がすべて最初から「説部叢書」に収録されたとは限ら

ない。長年にわたり小説目録の作成に従事してきてその事実に気づいた。

商務印書館が「説部叢書」を成立させる過程の問題だ。綿密な計画を立てて「説部叢書」を発足させたわけではなさそうに思う。翻訳小説をいくつかの別叢書名で刊行しつつ途中から大型「説部叢書」に編成しなおした。その際に吸収されなかった作品も多い。

阿英目録で困るのはその区別がつかないことだ。後述するが「説部叢書」の前に「新訳」「欧美名家小説」などの名称を与えられた作品群がある。阿英はそれらの分類名称を無視した。叢書名が見えなければ作品刊行の前後関係もわからない。研究者は基本的に阿英目録を利用する。だからそこにある翻訳小説のどれが「欧美名家小説」か「説部叢書」なのか判別できない。別の場所で「説部叢書」とあるのを見てああそうなのかと気づくことになる。

たとえばドイル『補訳華生包探案』は[阿英151]では無印だ。しかし本来は「説部叢書」元版第一集第四編である。そういう微妙な点を説明している。

『叙録』のつぎの特色について述べる。

関連する叢書まで詳細に言及するのがよい。それぞれが関係するという認識がある。だから記述することができた。付建舟が持つ見識の高さがうかがえる。

具体的に述べよう。『叙録』の書名に掲げるのは「説部叢書」だけだ。しかし単に「説部叢書」だけを提出して終わりではない。同じ漢訳がいくつかのシリーズに分類されて出版されたことが判るように工夫した。「新訳」「欧美名家小説」「説部叢書」「小本小説」「林訳小説叢書」などになる。はっきりとわかるように記述している。ここは重要だ。

そのうちの「小本小説」は清末から民初にまたがる。「林訳小説叢書」は民初刊行だ。

「説部叢書」とほかの「新訳」「欧美名家小説」などの関係が阿英目録では明確に区別でき

ないと重ねていう。前述のとおり阿英は叢書名を採録しなかったからだ。たとえば同一書名であるが最初は「欧美名家小説」と称されのちに「説部叢書」に編入されるものが存在する。

1例を示す。ヨーカイ・モール著、周作人訳『匈奴奇士録』(1908)がある。

阿英目録[阿英119]では角書不記、匈牙利育珂摩爾著「匈奴騎士録」と書いて書名を誤記する。また叢書名不記だ。

初版は「欧美名家小説」の1冊として刊行された。これが民国後にリボン文様の「説部叢書」2集第51編(1915)となる。ゆえにこの再版本に示された初版1908年を「説部叢書」2集第51編の刊年だと勘違いする研究者がいる。陳大康[編年④1609]だ。

もう1例をあげる。ハガード作、林訳『雙雄較劍録』だ。初出は『小説月報』連載(1910)である。そののちに「小本小説」(1914)、「説部叢書」2集本(1915)、「林訳小説叢書」(刊年不記)に収録された。『叙録』はすべてを記述する。だが阿英目録166頁では『小説月報』掲載しか示していない。阿英目録の収録対象が清末までだからしかたがないといえそうだ。それを不足だというのは言い過ぎであることは承知している。だが指摘せずにはいられない。

微妙、瑣末だといわれるかもしれない。だが細かい区別ができないのは研究という側面からいえば不都合だ。

付建舟はそこにある叢書名を明記した。「袖珍小説」がないのは「説部叢書」とは無関係だからだろう。問題はない。刊年の違いによって収録叢書の遍歴変遷が明らかになる。

最初は雑誌掲載の漢訳作品が後の「説部叢書」に収録される。それを判断する材料が提供されたということだ。『叙録』によって追跡できるようになった。いくつかの不明箇所が解消されると思う。

さらなる特色は原作考察にあたって典拠とし

て先行論文を示しているところだ。その積極的な姿勢がよい。

自他の区別を明確にしているといいなおすことができる。根拠を示さないばあいは付建舟が自分で発見したものだ。

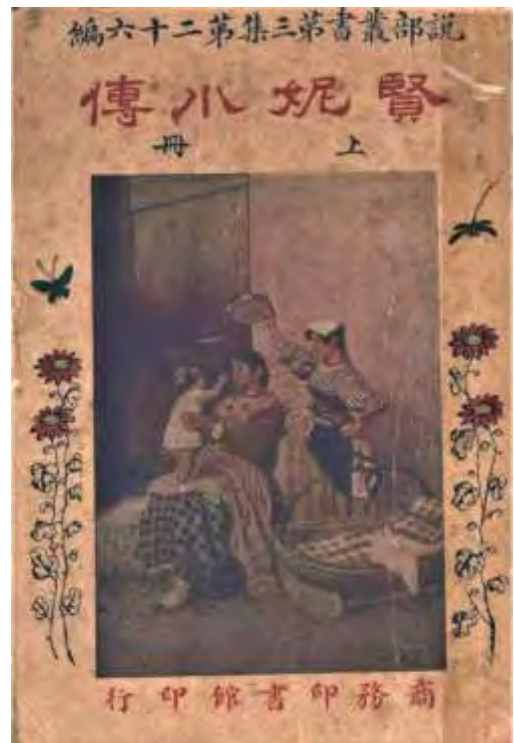
境界をあいまいにする研究者がときたま出てくる。事実は誰が見つけても事実すぎないというのだそうだ。そういう姿勢を見せられると本当にながかりしてしまう。

だが付建舟はそこを厳密に線引きしている。先行文献に広く目を配って原作、原作者についてできるだけ説明する。外国作家についてはネット情報も活用する。電腦環境にめぐまれた現代の研究者らしい。いちいち典拠を明らかにしているのは学術的態度としてあるべき姿だ。正しい。

## 新しい発見

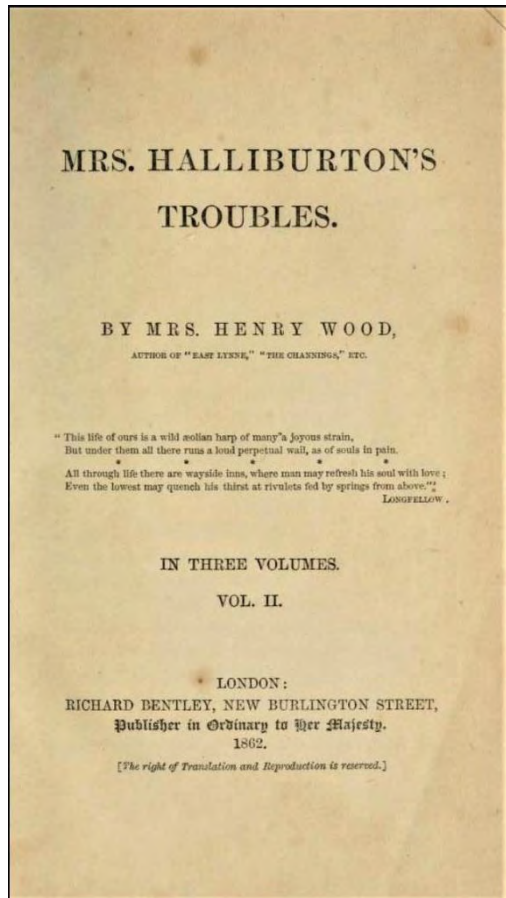
新しい発見があることを紹介する。

(英)亨利瓦特女士著 丁宗一、陳堅編訳 冷風校訂『賢妮小伝』(「説部叢書」第3集第26編 1917)の原作だ(この部分はウェブサイトで報告した)。



該漢訳の原作は MRS. HENRY WOOD “LADY GRACE” (1887) だと記述してきた。根拠はある。『商務印書館図書目録(1897-1949)』(1981)の「説部叢書」にそう明記してあるからだ。樽目録第11版にもそう書いた。それについて付建舟は別の書名を掲げた(231頁)。

私が出版社を補足して次のとおり。



MRS. HENRY WOOD "MRS. HALLIBURTON'S TROUBLES." LONDON: RICHARD BENTLEY, 1862

付建舟の指摘は正しい。ネットで原本を確認した。そこから原作の書影を引用して示す。

ただし彼はそれが新発見であることを書かない。謙虚な研究者であるようだ。しかし先行文献の誤りであることを指摘したほうがよかったと思う。異なる原作が並べられているだけだと

読者は困惑する。そのどちらが正しいのかわからない。以前からいわれている“LADY GRACE”は間違いだと断言すれば迷う人はいなくなる。翻訳小説研究を前進発展させるためには間違いだと明記する必要がある。

### 「説部叢書」刊年表記の注意点

見逃しがちだが「説部叢書」奥付にある刊年表記に異同があることがある。作品によっては初版と再版では正確さの点で差異が生じているということだ。多くはないが実際にある。商務印書館は刊年表記についての管理がゆるい。そこでもうひとつの誤解が生じる。奥付にある刊年の記載にだまされる研究者が普通に出現するのだ。根が深いという。

たとえば『海外拾遺』がある。初版と再版では刊年表記が異なる。

初版 [付説207] 写真あり、英国畢脱利士哈拉丁原著、新訳、光緒三十四年(1908)七月初版

再版 [付説207] 写真あり、四集系列第<sup>二</sup>二集第七十二編、戊申年(1908)七月十六日初版、民国四年(1915)十月十九日再版

興味深いのは初版の原作者名が再版では消失することだ。また初版の刊年は「七月」のみだが再版では「七月十六日」と細くなる。さらに該作品は最初は「説部叢書」には収録されていない。1915年になってあらたに2集に組み込まれたことがわかる。

再版の記述に惑わされたのが陳大康だ。

[編年④1576] 英国畢脱利士哈拉丁著、商務印書館編訳所訳述、光緒三十四年七月十六日<sup>二</sup>(1908.8.12) 出版、説部叢書二集第七十二編<sup>二</sup>

再版を信じて初版にはない十六日を記入して



しまった。しかも「説部叢書二集第七十二編」と書いて民国刊行の「説部叢書」2集を示す間違いを犯している。別作品についてすでに指摘したような気がするがかわらない。著名な陳大康が誤るくらいに商務版「説部叢書」に関する認識は一般的に希薄なのだ。本『叙録』が存在する価値がよくわかるだろう。

もう1例として『戎馬書生』の初版と再版の奥付を見る。

初版 [付説260] 写真あり、四集系列第三集第八十九編、民国九年(1920)四月初版  
再版 [付説260] 表紙写真なし、四集系列第三集第八十九編、民国九年(1920)三月初版/民国十年(1921)一月再版

初版は「四月」刊行とする。だが再版の奥付では初版について「三月」と誤る。するとここに引っかかる研究者が出てくる可能性がある。再版の記述を見て初版は三月に違いないと思いつく。その結果実際は四月刊行であるにもかかわらずその前の三月に配置したりする。初版で確認することが重要だ。

このような判定が可能になるのも『叙録』に写真が掲げられているからである。

### 誤記に対する処理のしかた

関連して述べる。私が『清末民初小説目録』で以前から存在する誤記をそのまま保存している理由を説明する。

目録作成の出発点は阿英目録だった。1980年代の日本では利用できる目録はそれくらいしかなかったのだ。清末民初小説の目録作成を日本で企画した。そのとき日本に小説の実物(雑誌を含めて)はほとんど所蔵されていなかった印象がある。

実藤文庫に「説部叢書」のいくつかがある。当時としてはまとまった方だったと記憶する。せっかくだから今数えてみた。『清末民初小説

目録』には単行本で実藤文庫から全56種を収録する。そのうち商務印書館本が19種であり「説部叢書」はわずかに10種だ。あやふやな記憶だった。圧倒的に少ないといわざるをえない。清末部分は1,610項目の阿英目録を基礎とした理由である(阿英目録を分解した数字だ。収録種類数とは異なる)。

現在の『清末民初小説目録』には創作、翻訳を含めて約37,100項目を記録する。阿英目録と比較するために清末部分だけを抽出してみる。全11,131項目は阿英目録の約6.9倍になる。阿英が記録したのは現在から見れば14.5%に過ぎないということもできるのだ。その収録規模が巨大化しているのがわかるだろう。

あとから判明したことが阿英目録には記述の間違いがいくつかある。原作者の漢字表記が実物と異なるなどだ。それを訂正してしまうと過去の記録が消滅してしまう。研究の前進発展の跡が見えなくなると判断している。

中国には樽目録について誤りが多いと批判する研究者がいた。そういう人の特徴は誤りの具体例を指摘しないことだ。根拠を示さず印象操作をする。誤りもなにも樽目録は阿英目録などの先行文献を主として集めて成立していることを知らないらしい。細かく読んでいるとは思えない。

誤りが多いと批判することはすなわち彼らの師匠、先輩たちの業績を批判することと同じなのだ。そういう構造になっているのに気づかない。あくまでも他人事でとにかく批判したい気持ち先行するようだ。自分で小説目録を作成する意欲のある人は軽々しくそのように書くはずがない。

阿英の記述を残しているから疑問が生じた。付建舟はそれについて述べている。

『青衣記』の英国人著作者がふたりいることを指摘する。樽目録第9版にそれが出現している。すなわち英国の傅蘭錫と傅蘭錫である。「ふたりは同一人物であるが結局のところどち

らの表記が正確なのか、あるいはどちらも正確なのかはさらなる調査を待つ」(205頁)と説明する。

樽目録が傳蘭錫とする根拠がある。阿英目録126頁にそう記録しているからだ。

だが見てほしい。付建舟の『叙録』205頁には新訳の奥付が掲載される。それには「原著者英国傳蘭錫」とあるではないか。そうすると阿英の書き誤りだとわかる。実物にある傳蘭錫原著とすべきだ。目録よりも実物を優先させなければならない。「どちらが正確か」と疑問を提出する箇所ではないのだ。(樽目録第12版では注をつける)

『叙録』にはごくまれに疑問に思う箇所もある。しかし付建舟が基本的に実物にもとづいて忠実に記述していることに間違いはない。特色のひとつだと強調していい。

私は目録作成に孔夫子旧书网も利用する。注目する理由は書影が掲載されているばあいがあるからだ。書店が施した解説は読まなくてもいい。その奥付写真が重要なのだ。

### 不足の箇所など

『叙録』の参考文献を見る。

樽目すなわち樽本編『清末民初小説目録』について『叙録』の参考文献には3種類を掲載する。

発行順に並べなおす。略号を使用すると第3版(2002)、X第7版(2015)、第9版(2017)だ。本文中に引用されている第6版(2014)は未掲載である。

旧版を参考文献にあげるのはかまわない。しかし実際に使用するばあいには最新版を掲げるのが研究の原則ではなかろうか。旧版の誤りを新版は訂正しているだろうという理解が成立するからだ。旧版にもとづいて誤りを指摘するのは生産的ではない。

たとえば『天際落花』の原作刊年を樽目第6版で1855年にしているのは間違っていると指

摘する(279頁)。それは事実だ。[付日286]において1885年が正しいと書かれたから樽目X第7版でそのように訂正した。付建舟はそれを見ている。すでに訂正された誤りをわざわざ取り出す必要があるのだろうか。疑問に思う。

説明に少しの齟齬が生じている箇所がある。説明をほどこしたものを示す。

『八十日』[付説320] 写真あり、四集系列第<sup>二</sup>二集[第]五十編。表記の揺れは以前の[付二88]から説明を流用したから生じた。

『大荒帰客記』[付説337] 写真あり、「《林訳小説叢書》第二集第十八編、上海商務印書館、時間不詳」とするは誤り。

前者の「第<sup>二</sup>二集[第]五十編」は「二集」であり「第五十編」の「第」が抜けているという意味である。

後者の『大荒帰客記』は「林訳小説叢書」に収録されていない。だいいち林訳ではないから該叢書に入れられるはずはない。林訳小説叢書の該集編番号は『奇女格露枝小伝』である。勘違いだろう。

付建舟が刊行してきた以前の「経眼録」シリーズと重複する作品はある。以前の記述をくり返す部分があるのはかまわない。

書影を示しているが説明の文章と一致しない箇所も出てくる。2例をあげる。

『空谷佳人』小本小説[付説82]には写真がある。説明して「無発行年月」(82頁)とする。だが写真の奥付には「辛亥年三月初版/中華民國九年二月六版」と明記される。写真と説明が一致しない。

『回頭看』初集第12編[付説358]だ。写真がある。その奥付は「乙巳年(1905)二月初版/民国二年(1913)十二月版」(360頁)となっている。ところが付建舟

はそれを「乙巳年(1905)二月初版、民国三年(1914)四月再版」と書く。1913年と1914年はどちらも重版本がある。それらを付建舟は見ていると思う。ただ書影と説明が一致しないのは具合が悪い。説明に工夫をする必要があった。

前者『空谷佳人』は「説部叢書」とは別系列の「小本小説」だ。後者『回頭看』はたまたま紙幅の関係で1914年再版本の写真は掲載されなかったのだろう。いってみればそれほど「説部叢書」は細かく重版された証拠ともなる。それらを追跡して正確に記述することは普通の持続力ではむづかしい。それを実行している付建舟の努力は高く評価されるべきだ。

「説部叢書」試行本の存在

実際に存在していながら言及がない。そういう意外な商務版「説部叢書」がある。

私は「説部叢書」試行本と称している。商務印書館が刊行した実物に間違いはない。しかし従来の研究者はほとんど触れたことがない。私は鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』(復旦大学博士論文2013)でその存在を知った。

なぜ試行本というか。それは元版タンポポ文様の表紙を持ち第一集と本来の集表記をしながら編番号が元版ではないからだ。

元版であれば各集は第十編までを収録する。第11編以後のものはない。第11編があるのは後の初集であって全100編だ。

ところがその規格に外れた刊行物がある。私の知る限り第一集第11、12、13、17、22、23、26、34、35、39、80編の11種である。さがせばもっと出てくるだろう。

ひとつの書影を示す。



商務印書館出版

五分	二角	說小育教	生天
記石棄石埋		編笑	
之法也	身作则	以端本	為購閱
洵宜	校諸君	界凡學	於青年
以貢獻	之模範	學教師	描摹小
是書專	沈迷科	七醫士	是編述

角一

說小探偵	案士醫七	本小
------	------	----

以鑒者道

減絕人

焉世之

皆就刑

情破綻

甚迨奸

顧人道

之計不

行試驗

人為實

解剖生

學專以

沈迷科

七醫士

是編述

乙巳年七月初版  
中華民國三年四月再版

(鬼山狼侠传二册)  
(每部定價大洋壹元)

編譯者 長岡樂侯 曾林宗 鞏紆

發行所 商務印書館

分售處 上海 北河南路 北首寶山路  
商務印書館  
上海 棋盤街 中市  
商務印書館  
北京 孫家胡同 德江 吉林 天津 濟南  
商務印書館  
開封 太原 西安 成都 重慶 長沙  
商務印書館  
桂林 漢口 南昌 蘇州 杭州 廣州  
梧州 汕頭 香港 貴陽 南京 蕪湖  
鎮江 揚州 徐州 鄭州 濟南

★此書有著作權翻印必究★

前清宣統三年四月初三日呈報五月十四日註冊

“NADA THE LILY” 1892)

(英) 哈葛德著 林紆、曾宗鞏譯『鬼山狼侠传』上下卷 (HENRY RIDER HAGGARD

これは [林訳全集05] に収録される。角書な

し、上海・商務印書館、乙巳年七月初版／中華民國三年四月再版、説部叢書第一集第二二編と表示がある。

変化の基本を復習しておく。乙巳年七月初版は元版タンポポ文様で第三集第二編に存在する。これが初集リボン文様に改称されると初集第22編(1913.12再版／1914.4再版)になる。これが通常の、というが従来のよく知られた変遷だ。

上掲版の表紙はタンポポ文様だから元版に違いない。ところが書影を見てほしい。初集ではなく第一集の第二十二編だ。表紙と集番号が元版であるにもかかわらず第二十二編という部分は後の初集である。元版と初集の両者を混合させている。きわめて奇妙である。

従来の研究ではほとんど説明がない。第一集と称するのは元版だし編番号の第二十二編は初集だ。元版と初集の間にあるように見える。ゆえに私は「元版の延長上にある試行本だろう」という。

付建舟はその存在を知っているはずだ。ただ『叙録』において追加説明する時間的余裕がなかったらしい。説明がないのは残念だった。

### 索引作成の必要性

これほど充実した内容のある『叙録』だからやはり索引があつてしかるべきだ。あれば利用する研究者は活用できる。資料的意味を持つ書物だからこそそれを強く感じる。

学術専門書には作品索引を作成するのが当たり前のことになってほしい。こまかい部分にすぎないが書かずにはいられない。

### 今後への期待

本『叙録』は「説部叢書」研究の基礎資料として出発点となる重要刊行物だと重ねていう。

いくつかの不足と誤記はある。しかしそれによって『叙録』の価値が下がることはない。商務版「説部叢書」の全体を1冊にまとめたのは中国で最初だという事実は動かないからだ。そ

こを勘違いすべきではない。

説部叢書の成立について付建舟はすでに論文を発表している。私が知っているのは以下の2篇だ。

付建舟「談談《説部叢書》」『明清小説研究』2009年3期(総第93期) 2009発行月日不記  
付建舟「商務印書館“説部叢書”初集考述」『漢語言文学研究』2015年第4期 2015.12.15

『叙録』という内容のある書物を実現させた。付建舟がそれにもとづき時間経過を軸に整理のうえ上記原稿を補充拡大して『商務版「説部叢書」成立史』を書かれることを期待している。罍

【附記】『叙録』についての疑問一覧表は清末小説研究会ウェブサイト(2019.10.10)に掲載した。

張治「評<<説部叢書>叙録>:電子書截成就的文献学創新」(「上海書評」『澎湃新聞』2020.1.16電字版)が公表された。付建舟氏のご教示に感謝します。

### ★

#### 張 治『蟻占集』

杭州・浙江大學出版社2017.7 六合叢書  
林紆訳過丘吉爾の小説  
新見晚清翻譯小説<<奇言広記>>  
林訳小説作坊の生産力

#### 張 治『文学的異与同』

北京・商務印書館2019.1 光啓文庫  
中西文学交流瑣談之四:商務印書館“説部叢書”里的原作  
中西文学交流瑣談之四:商務印書館“説部叢書”里的原作(続)  
書訊三則之二——《中国科学幻想文学史》、(日)武田雅哉、林久之著、李重民訳、浙江大學出版社、2017年  
書訊三則之三——《作為一種思想操練的五四》、陳平原著、北京大學出版社、2018年

## 关于林译小说口译者力树萱的一则材料

王 玉 梁 艳

与林纾合作的口译者有十多位，力树萱是其中比较不知名的一个。许多论著在介绍林译小说的口译者时，对他基本上是一带而过、语焉不详。笔者近年一直关注林译小说口译者的资料，近日偶然搜集到一则关于力树萱的史料，并最终破译了他的生平。

据樽本照雄编《清末民初小说目录》（第11版），力树萱和林纾合译的作品共三部：《情窟》、《罗刹雌风》和《女柁机》。其中，《情窟》原作者是英国威利孙，1912年11月1日至1913年9月30日连载于《平报》，1916年5月由商务印书馆出版单行本。《罗刹雌风》原作者是英国希罗，1913年4月25日至8月25日连载于《小说月报》，1915年1月由商务印书馆出版单行本。《女柁机》载于1913年7月16日《中华》半月刊第一期。

从1912年11月至1913年9月，力树萱与林纾合作时间只有短短的一年。1912年，中华民国成立，林纾时年61岁。力树萱是谁？为何在此时和林纾合作？关于他的身份，只有译作上的署名“永福力树萱口译”寥寥数字（见图1）。这个“永福”，显然是他的籍贯。有学者认为，他是广西永福人<sup>\*1</sup>。笔者最初也持这种看法，因为广西桂林市有永福县。又有论文说，力树萱是福建永福人<sup>\*2</sup>。笔者一核查，福建现在没有永福县，但龙

岩市有个永福镇。孰是孰非？而且除了这三部译作外，找不到力树萱其他任何署名文章著作，显然他不是文学圈中人。

正在疑惑之际，笔者检索到一条有用的信息。《天津海军医学院历届毕业生名单》显示，该院第十届毕业生，共计26名，力树萱是其中之一<sup>\*3</sup>。因为力树萱的名字并不常见，这位极有可能就是笔者要找的林译小说口译者。笔者顺藤摸瓜去查阅天津海军医学院历史资料。据陈景芾《记天津海军医学校》：1888年8月，北洋大臣李鸿章设立天津储药施医总医院。1894年5月，改为天津总医院，内设西医学堂，专司培育军医人才。西医学堂之成立，实为中国造就西医人才之始。1915年10月，改为天津海军医学校。1933年该校停办，历时37年，毕业生16届，计218名。至此，笔者基本确认，这位毕业于天津海军医学院的力树萱即是林纾合作者。一是因为时间上大致吻合，二是学习西医意味着他能接受较好的外语教育。果不其然，笔者又找到了一篇重要文章——姜文熙的《北洋医学校史稿》。该文称，北洋医学堂总教习，是原在特勃林大学医科任教的陆军少校军医欧士敦（Heus Ton）。各门医学课程全用英文课本，课堂讲授也用英文。图书馆医学各科参考书都是英文本<sup>\*4</sup>。该文甚至提到了力树萱，“民国以来，日本、美国、法国等曾先后召开军医会议邀请我国派代表参加。北京政府曾先后派出北洋医学校毕业的……第十班力树萱等代表中国前往参加”<sup>\*5</sup>。

有了这个线索，笔者最终找到了一则关于力树萱的珍贵史料。在1924年《北洋医学学会会报》第五期（见图2）中，刊有一份《北洋医学学会会员姓名行号籍贯职业暨住址通信处一览表》<sup>\*6</sup>，其中就有力树萱的生平信息。该资料（见图3）显示，力树萱，英文拼音名为 S. T. Lee，别号舒东，39岁，籍贯福建永泰，宣统三年（1911年）四月毕业，现任陆军部军医司科员，住北京老墙根三十七号（应指宣武门外老墙根街—笔者注）。

原来，力树萱就是出身名医世家的力舒东



(1886-?)。力舒东父亲是清朝御医力钧(字轩举),1910年随英国公使出国考察,周游了德国、法国、俄国、瑞士、奥地利、意大利等国家,参观医院、医校,购买大量西医图书<sup>\*7</sup>;母亲姓杨<sup>\*8</sup>。力舒东担任过中华医学会副会长(1916年在上海召开第一次大会)、尚志医院院长等职。梁启超治疗肾病时,力舒东在北京协和医院任职。因此,梁启超在写给儿子梁思顺的信中曾说,“顷因丁在君、力舒东坚决主张要入协和,已决定明天便入去了”<sup>\*9</sup>。他有个女儿叫力伯津<sup>\*10</sup>,肄业于春明女中,为当时北平女界的体育健将,《安琪儿》周刊刊登过她的照片。力树萱还是史学家郑天挺的表姐夫<sup>\*11</sup>。至此,力树萱的籍贯也迎刃而解。福建永泰县,宋元明清时称永福县,1914年恢复旧称永泰县。所以力树萱自署籍贯永福。他是福建人(故里为永泰县白云乡樟洋村),而不是广西人。

力树萱和林纾合作,应该与其父亲力钧相关。力钧和林纾是同乡好友。1897年,力钧等人将林纾旧居建成苍霞精舍<sup>\*12</sup>。在北京时,力钧和林纾常参加福建在京名老的“晋安耆年会”<sup>\*13</sup>。从这个角度看,就不难理解力树萱为何成为林纾的口译者了。力树萱是林纾的子侄辈,英文又好,自然是口译者的上佳人选。他们主要在1912-1913年合作,那时力树萱刚毕业,已从天津回到北京,这使合作成为可能。两人合作时间不长,意味着力树萱对小说翻译兴趣不大,或是工作繁忙,时间不允许,毕竟翻译只是他的小小副业。他和林纾合译的作品数量较少,也不是什么名著。早在1925年,寒光就在《林琴南》书中说:“永福力树萱:英文口述者。所译如《罗刹雌风》和《情窟》都是没什么价值的。”<sup>\*14</sup>但笔者认为,要透彻分析林译小说,研究口译者是前置条件之一。因此,在这里将这则力树萱的生平材料公诸同好。 □

(作者单位:上海行政学院校刊编辑部;同济大学外国语学院)

#### 【注】

- 1) 李伟:《中国近代翻译史》,齐鲁书社,2005年,第254页。

- 2) 林元彪:《文章学视野下的林纾翻译研究》,华东师范大学博士学位论文,2012年4月。
- 3) 高时良,黄仁贤:《中国近代教育史资料汇编 洋务运动时期教育》,上海教育出版社,2007年,第586页。
- 4) 马玉田,舒乙:《文史资料存稿选编 24 教育》,中国文史出版社,2002年,第340页。
- 5) 马玉田,舒乙:《文史资料存稿选编 24 教育》,中国文史出版社,2002年,第342页。
- 6) 《北洋医学学会会报》1924年第5期,第26页。
- 7) 融之:《协和医脉》,中国协和医科大学出版社,2014年,第264页。
- 8) 王桥庵:《夏历三月十五日寿力舒东医士母杨太夫人七十并序》,《讲坛月刊》1937年第6期。
- 9) 梁启超:《梁启超家书校注本》,漓江出版社,2017年,第676页。
- 10) 《安琪儿》(北京)1930年第34期,第1页。
- 11) 陈洪:《南开学人自述》(第1卷),南开大学出版社,2016年,第56页。
- 12) 龚任界:《林纾书画集》,中国书店,2014年,第188页。
- 13) 孟庆云:《中医百话》,人民卫生出版社,2008年,第260页。
- 14) 寒光:《林琴南》,中华书局,1925年,第70页。



图1 《罗刹雌风》书影

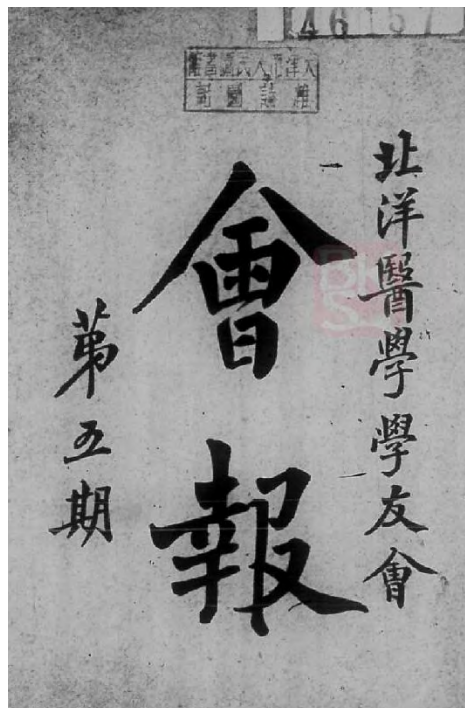


图2 《北洋医学学友会会报》第五期封面

期 五 第

姓名	英文拼音	別號	年歲	籍貫	畢業	現任職業	現在住址
秦旭昌	Chan Hui Chang	龍南	四十	直隸	前	醫	灤縣北街廣記
吳奇森	C. S. Wu	舒東	四十	廣東	前	醫	唐山防疫醫院
力樹讓	S. T. Lee	舒東	三九	福建	前	醫	北京老舖根三
吳國卿	G. T. Wu	觀光	三八	廣東	前	醫	上海北四川路
林聖毅	Lam Shing Kip	初庭	三七	廣東	前	醫	香港永樂街四
林錦華	Lin Chin Hua	桐公	三七	福建	前	醫	上海江西路五
梁承藻	Lieng Chan Sui	耀遠	三七	廣東	前	醫	上海江西路五
劉漢榮	Lau Han Sun	耀遠	三七	廣東	前	醫	上海江西路五

北洋醫學學友會  
二六  
記附

图3 《北洋医学学友会会报》第五期内页

【再録】

菊池幽芳『乳姉妹』の原作（速報）

本稿は清末小説研究会ウェブサイト2020.1.23に掲載したものです。

菊池幽芳『乳姉妹』（春陽堂1904）の原作について報告します。

幽芳『乳姉妹』の原作は明治の同時代から筆名バーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY（本名シャーロット・M・ブレイム CHARLOTTE M. BRAME、1836-1884）『ドラ・ソーン DORA THORNE』だといわれてきました[堀07-154]。

ところが同一作品を翻訳した末松謙澄、二宮熊二郎合訳『谷間の姫百合』（金港堂1888-1890）が先行するのです。

幽芳は先行翻訳があるものをなぜふたび底本としたのか。理由がわかりません。

堀啓子はその隙間をいろいろとつくろった。

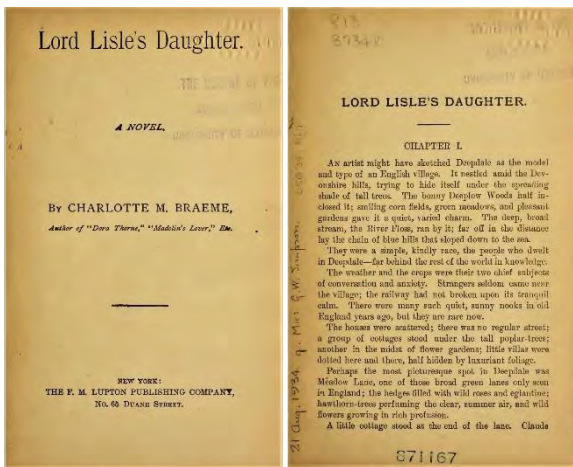
「翻訳である『谷間の姫百合』の限界に、敢えて同一原作のつくり変えを以て対抗しようという挑戦である」[堀07-152]

「幽芳が敢えて *Dora Thorne* を原作に選んだ意義を問うならば、「谷間の姫百合」から十五年、読者に圧倒的な支持を得た同作のヒロインたちを、時の流れとともに成長させ、変貌させることで、骨太な作品を再生し、読者を魅了するという試みがあったといえるのではないだろうか」[堀07-150]

「敢えて同一の原作を擁したことにより、「乳姉妹」はけっして「谷間の姫百合」の焼き直しとしてではなく、新たな別個の作品として作り上げられたことを証明してみせた」[堀07-150]



菊池幽芳『乳姉妹』前編



CHARLOTTE MARY BRAEME "LORD LISLE'S DAUGHTER."

普通はBAME

open library より

「敢えて」をくり返して苦しい説明です。なぜ苦しいかといえば『乳姉妹』の原作を『ドラ・ソーン DORA THORNE』だと思いついでそれを前提に立論しているからです。別作品を底本だと誤認したから説明に齟齬が生じて的外れになるのはしかたがありません。

幽芳『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』ではありません。本名シャーロット・M・ブレーム "LORD LISLE'S DAUGHTER." (1880) です。

英国李来姆著『一束縁』(商務印書館1906)の原作について張治の指摘が先日よりあります。『一束縁』の原作は CHARLOTTE MARY BRAEME (1836-1884) "LORD LISLE'S DAUGHTER." (1880) だという[張治20]。

それを確認し把握すれば日本の近代作品に関連する問題があることに気づきます。追及していくと "LORD LISLE'S DAUGHTER." が漢訳『一束縁』とは別にそれよりも少し前の日訳『乳姉妹』に一致したという経緯です。

中国張治の新発見が遠い昔に出現した日本幽芳『乳姉妹』につながったというわけ。

『乳姉妹』はイギリスと日本、中国をそれぞれ結ぶ当時の翻訳界の1例でもあります。ただし多く見られる、たとえばあの漢訳『電術奇談』のようにイギリス→日本→中国と受け継がれていったのとは方向が違うのです。(樽本照雄)

【略号】

[堀07]堀啓子「翻案としての戦略：菊池幽芳の『乳姉妹』をめぐる」『東海大学紀要・文学部』第86輯(2006)2007.3.30 電字版

[張治20]張治「評<<説部叢書>>叙録」：電子書截成就的文献学創新「上海書評」『滬濱新聞』2020.1.16 電字版

(なお菊池幽芳『乳姉妹』の原作に関しては樽本照雄が学術的優先権を有します。『電術奇談』の日本原作も同様)

予告：次号に「菊池幽芳『乳姉妹』の原作」本篇を掲載します。「漢訳『一束縁』と日訳『乳姉妹』」と続く予定です。

清末小説から

- 張 治○【書評】評<<説部叢書>叙録>：電子書載成就の文学学創新 「上海書評」『澎湃新聞』2020.1.16 電字版
- 吉田登志子○日中話劇黎明期における日中演劇交流 『演劇学論集 日本演劇学会紀要』2009春 通号48 電字版
- 王 濤○誤取：<<夜帰人>>問題探究 『世界文学評論』2011年第2期
- 張 永久○『鴛鴦蝴蝶派文人』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2011.4
- 周 瘦鵬○『姑蘇書簡』北京・新華出版社1995.5
- 周 全○我的父親 周瘦鵬『姑蘇書簡』北京・新華出版社1995.5
- 蔵本邦夫○移入史初期の『ドン・キホーテ』をめぐって 『関西大学外国語教育フォーラム』12 2013.3.31
- 道行千枝○日中シェイクスピア受容——導入期についての一考察 『福岡女学院短期大学部紀要 英語英文学』第41号 2005.3 電字版
- 余珍+劉建松○蒙住你的眼睛——英国小説<<夜帰人>>解説 『読写月報(高中)』2017年第10期(本文表記は2017年第4期)
- 趙 稀方○翻訳与文化協商——從<<毒蛇圈>>看晚清偵探小説翻訳 『中国比較文学』2012年第1期(総第86期) 2012.1
- 楊 玉峰○『南社著訳叙録』中華書局(香港)有限公司2012.12
- 張明観、張慎行、張世光編著○『南社社友図像集』上海人民出版社2019.10
- 柳 光遠○(『南社社友図像集』)話説南社(代序) 張明観、張慎行、張世光編著 上海人民出版社2019.10
- 頼 慈芸○『訳難忘：遇見美好的老訳本』台湾・聯経出版事業股份有限公司2019.5
- 張 恵○反古、雅化与催化——周瘦鵬<<欧美名家短篇小説叢刊>>の取材、訳風与影響 『中国現代文学研究叢刊』2019年第10期(総第243期) 2019.10.15
- 陳 俊啓○『依違於伝統現代、中西——晚清小説新

- 詮』台湾・文史哲出版社2019.11
- 徐 蒙○『中華書局前期雑誌出版研究(1912-1937)』台湾・元華文創股份有限公司2019.11
- 邵 文菁○日本翔鸞社承印中文書籍述略 『新聞出版博物館』2019年第2期(総第35期) 2019.11
- 曹 芬芬○著易堂書局盛衰小史 『新聞出版博物館』2019年第2期(総第35期) 2019.11
- 劉徳隆、劉珣○劉鶚与“養天下”的太谷学派 『文匯學人』第415期 2019.11.29

張永久『摩登已成往事——鴛鴦蝴蝶派文人浮世絵』

天津・百花文藝出版社2012.1

注：張永久『鴛鴦蝴蝶派文人』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2011.4と同じ

- 夜晩也有美麗時(序言)……(張)映泉  
寂寞文章幾人識?——畢倚虹的悲歎人生  
傷心人別有懷抱——徐枕亜的情愛小史  
風中的蝴蝶——陳蝶仙的伝奇人生  
悲涼秋声,如潮似水——李涵秋的心路歷程  
人海茫茫夢天涯——嚴独鶴的私人生活史  
滿腹心事与誰言?——包天笑的流年碎影  
分明是書生——葉楚傖的本色  
斷腸人在天涯——為范煙橋自定年譜<<駒光留影録>>補白  
變了調的夜鶯在歌唱——周瘦鵬<<姑蘇書簡>>閲読札記  
構築迷宮的人——程小青的偵探世界  
忪慚俠氣消磨尽——宮白羽的心情

